
白銀月夜の狼

露草紺織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀月夜の狼

【NZコード】

N8224Y

【作者名】

露草紺織

【あらすじ】

ある雪の降り積もる朝、伯爵子息カーティスはなくしものを探しに森へ出かけた。

その森で彼は小さな少女を見つけた。

華奢な身体を覆う艶やかな長い銀の髪。濃蒼色の瞳。

その少女はフェリシアと名乗った。

フェリシアは何故か人間嫌いで、カーティスのことも誰も信用しない。

気遣つて温かい言葉を掛けても、冷たくあしらうばかり。

そして、彼女は寒い場所を極端に好む。
暖かい屋敷に招き入れようとすれば、眼を怒らせ激しく拒否するの
だ。「私は厳寒のあの森でないと生きられないのだ」と。

白く冷たい風が辺りの木々を撫でる。

葉も無い枝は、サワサワと哀しく軽い音を立てて静まる。
気温は下がっているというよりも、ない。水などの液体も存在しない。何故なら瞬時に凍ってしまうから。

生物が全くいないようなこの真っ白な冬の森。

真冬。闇夜。満月。雪。この条件が揃ったときのみ、「それ」は姿を現す。

白銀の体毛で覆われ、睫毛も白銀。

色が薄く、いかにも儂いといった感じで煙のよけに消えてしまいそうな。

しかし濃蒼色の瞳が爛々と輝き、儂いといつ印象を打ち消す。その瞳は、まるで。

狼。

そこには、一匹の狼が静かにこちらを見つめていた。

「何故だ……。何故死なねばならぬ。あのような下等な生物の為に
「下等は貴様だ。我が撃を破るなどと愚劣な行為を」

この場は冷たい。寒い。

緋色の髪。燃え盛る炎の如きその髪色は、我が種族にとつては不
愉快極まりない。いつだ、いつになれば……。

「お前は大罪を犯した。一度とここに現れるでないぞ」

それは、我が同胞を護るために犯した罪だととしても。生きるために殺したのだとしても。

撃を壊さぬために作られた撃は、あまりに残酷だ。

銀よ。かつて我を創っていた銀よ。
もう一度我を受け入れてくれたまえ。そして。

「あの森に。あいつの元へ……。逢いたいのだ……」

「あーあ、何でこんなこと……」

「コードに首巻に手袋に、と体中を防寒具で包み込んだ少年は小さく息をついた。

青い瞳に金髪が眩しく光るこの少年の名は、カーテイス・エアルドレッジ。エアルドレッジ伯爵家の三男坊である。

歳は十三。何となく大人に近づいてはいるが、その顔にはまだ子供特有のあどけなさがしつかり残っている。良く言えば「可愛らしい」、悪く言えば「童顔」だ。

何故彼がこんな時間にこんな所をうろついているのかといつと、「そもそもティファニーとカイルが悪いんじやないか。僕は何もしてないし。ティファニーのただの自業自得なのに……」

昨夜はカーテイスの姉・ジュリアナの十六回目の誕生日だった。普段から美しい姉だ。誕生日ということで侍女が気合を入れて召かしこんだジュリアナはいつもより増して美しかった。カーテイスは昨夜のジュリアナへは「美しい」「綺麗」しか口から出なかつた。他にこの姉を飾りたてる形容詞を思いつかなかつたのである。でも……。

でも、姉さまはお化粧なんかしなくても、とっても綺麗だよ。素直に述べるとジュリアナは、二口settと白い歯を覗かせながら、「ありがとう。今日一番嬉しい贅沢をもらつたわ。大好きよ、カーテイス」と白く華奢な腕でたつた一人の弟を抱きしめた。

その美しさと同等に、ジュリアナは心も美しかつた。困つている人を放つておけない性格なのだ。病氣で道端で転がつてはいる貧しい

乞食の少年を屋敷まで運び入れ、看病したこともある。

そんなジュリアナ嬢を祝おう、とエアルドレッド家に招かれた貴族が沢山屋敷に足を運んだ。勿論、親戚のベックフォード子爵家も。

ティファニー・ベックフォード。

茶髪の巻き毛が可愛らしいティファニーは6つ年下の7歳。カーテイスとは従兄妹になる。カーテイスの母とティファニーの父が姉弟なのだ。即ち、ベックフォード家はカーテイスの母の実家だ。

ティファニーは、ジュリアナに「ジュリアナ、お誕生日おめでとう」と抱擁を交わした。その後ウロウロしていたのだが、食事の準備をしていた侍女にぶつかり、その弾みで侍女は持っていた食事を食器ごと床に落としてしまった。それを見ていたジュリアナは、「用意が出来たら呼んでもらうから、カーテイスの部屋で遊んでいなさいね」と柔らかく微笑んで「あとは頼んだわよ」とカーテイスの耳に囁いた。

ティファニーに部屋で一緒に遊びよう、と告げるとティファニーはタタタッと走り出した。ティファニーはよくこの屋敷に遊びに来ているので、何処にどんな部屋があるのかよく知っている。階段を目散に駆け上ると、まだ登っている途中のカーテイスを急かした。「はやくはやく！ はやくしないと部屋を荒らしちゃうわよー」「無駄だよ。闖入者が勝手に入らないように鍵をしてあるから。そして鍵は僕が持ってる」

巻き髪少女は、カーテイスの答えにぷくっと小さな頬を膨らませる。

ようやく部屋の扉の前に辿り着いたカーテイスは、ポケットから黄金に輝く鍵を取り出した。鍵穴に差し込み回すと、ガチャ、と錠が外れて扉が開く。

カーテイスの部屋に入ると、あの動作の何が不思議なのか、ティファニーは小首を傾げた。

「ねえ、何で鍵なんかしてるの？ カーテイスを狙う悪者でもいる

の
?

じつやう動作が不思議だったのではなく、何故鍵をしているのか
が気になつたらしい。

カーティスは小さな巻き髪少女の質問に答えてやる。

「僕はこう見えて伯爵子息。現在のところ、爵位継承権第3位だよ？暗殺者がいたとしてもおかしくない」

まあ、どうせ僕に継承権なんかまわしてこないだろうけどね。だ

卷之三

やっぱり小さな巻き髪少女。頭の中も小さいらしい。カーテイス

「物陰からそおうつと覗いて、隙をついてハグサツ、ヒヤる奴らのことさ」

カーティスは自分の胸を突き刺す真似をした。ティファニーは怖がるだろうと思つたが、この幸せ少女に『恐れる』という感情は多分ない。ぴょんぴょん飛び跳ねて楽しそうに笑つた。跳ねるたびに、ドレスの裾がヒラツヒラツと舞う。

「プライスさんにも怒られたんだろ？」

プライスさん、というのはティファニーの女性教育係（家庭教師）だ。目まぐるしく動くティファニーを見つけては諫める。このお転婆少女を育てるのだから、きっと骨は折れまくるんだろうなあ。プライスの名前が出ると、いつも途端に大人しくなるティファニーだが今日は違った。

「はしたなくなんかないもん！ この前ジユリアナだつてティファ
ーとおんなじようなことしてたもの！」

「姉さまがティファニーみたいことするわけが……」

ハツとして口を噤む。思い当たることがあつたのだ。

ジュリアナはもう17。もうそろそろ社交界デビューをしておかしくない。社交界デビューをして婚約者を見つけるのだ。

そのためにはダンスを踊れなければならない。これは嗜みなんだ」とジュリアナが言っていた。

恐らくティファニーはジュリアナがダンスの練習をしていたのを見ていたのだろう。しかし、ジュリアナの（きっと）素晴らしいダンスと、巻き髪少女が飛び跳ねたのが『おんなじ』なわけがない。そこは訂正する。

「違うよ、ティファニー。姉さまのとは違うんだから、人前で飛び跳ねちゃダメだよ。ブライスさんが首根っこを？ まえて怒るよ、きっと。いや絶対！」

と今回は効果があつたようだ。ティファニーは興奮のため真っ赤になつていた顔がスッと鎮静した。そしてそのまま喋らなくなつた。そのまんますぎるな、と苦笑。カーテイスは優しく巻き髪頭を撫でてやつた。

「『めんごめん。ほらこれで機嫌なおしてよ。ティファニーには明るい笑顔が似合つよ』」

カーテイスはそう言つて立ち上がり、ある物を手に取つて戻ってきた。

それは、

「うわあ、すうーーー！ 鳥なんて初めて見た！」

ティファニーは声を荒げて、ぐるん、とした目を輝かせた。

カーテイスが持つてきたのは鳥籠だった。中には水色や青などの色鮮やかな鳥。カーテイスが12歳の誕生日のとき、ジュリアナからもらつたのだ。

「可愛いだろ。名前はカイルっていうんだ」

「へーえ。カイルっていうんだ。かーわあいい！」

語尾をやけに伸ばして、ティファニーは二口二口顔だ。そりやそうだ、鳥なんて滅多に見ないもんな。最近はとっても寒いし。そうでなくても僕たち貴族はほとんど屋敷から出ないし。

「あれ？ どうしたのかな、カイル？」

何かしたのかティファニー？　とカーテイスは一緒に鳥籠を覗き込む。

カイルの粒のような黒い瞳は、ティファニーの胸辺りを見つめて微動だにしない。

「ああ、ティファニーのこのブローチが気になるんだよ。鳥は光るもののが好きらしいし」

「へえ、そうなの。ねえ、カイルを籠から出していい？」

ティファニーがあまりにも笑顔を輝かせて言つものだから、カーテイスは許可した。

「いいよ。カイルは賢いから念図すればすぐ籠に戻るよ。例外にいてもね」

と言つと、ティファニーはカイルを鳥籠から出した。そして胸元のブローチを外してカイルの足元に置く。

カイルがブローチを興味津々で覗き込んでいた間に、ティファニーは窓際に駆け寄ると窓を開けた。瞬間（当たり前だが）冷たい風が部屋に吹き込んできた。

「ちょっと……。やめてよティファニー。寒いじゃないか」

「少しだけ少しだけ。ほうらカイル、外に出て」「らん」

カイルは飛び立つた。

ティファニーのブローチを嘴に携えて。

「ああ　　つ……」

ティファニーの絶叫が屋敷中に響き渡った。カーテイスはティファニーの口を塞ぐことしか出来なかつた。

こうして冒頭に戻る。

あのあとすぐカーテイスは口笛を吹いてカイルを部屋に戻らせた。

戻ってきたカイルの嘴には何もなかった。きつと重みに耐えきれずどこか（恐らく森。カイルは外に出せば絶対森に行く）に放置してきたのだろう。

ティファニーは泣きぱなっしで、カーテイスが慰めたが落ち着く気配がなかつた。ブライスを呼ぼうとしたが憚られた。あのブローチはティファニーの祖母の遺品なのだから。

ジュリアナの誕生日には何とか涙は引っ込んだが、目は真つ赤に充血したままだつた。食事をそこそこで席を立ち、ティファニーはブライスに連れられ密室に籠つてしまつた。

「ああもう、何処だよ。あんな小さいブローチなんか見つかるわけない……」

屋敷を出てからもうそろそろ一小時間になるだらう。手は悴んで、身体には血が巡つていない気がする。

もう諦めて帰ろうとした時に、小さな、しかしそく響く鈴の鳴るよつの声がカーテイスを引き留めた。

「探し物はこれか……？　朝早くから」「苦労なことだな……」

雪と回じ白銀の髪が見えた。

枯れ果てた木々。辺りを白に染め変える雪。この余りにも寒々しい森の中に、その少女はいた。

顔は人形の如く端整。筋が通っている高い鼻。小さな薄い唇。まさに十全十美という言葉が相応しい。肌は色が無いのかと疑うほど白い。少女が身に着けているのはあまりにも簡素な衣服だ。真っ白なワンピースのようなもので、膝丈ほどしかなく細い腕や脚が晒されている。

髪は真っ直ぐで長く、小柄な少女を覆い隠すほどだ。

すべてが『白銀』で統一されている身体に、唯一の『色』がある。瞳だ。濃蒼色で、獲物を捜しているかの如く爛々と危険な輝きを放っている。右眼がやけに。それはまるで、 肉食獣。

普通の生物なら一瞬で凍えてしまいそうなこの雪。しかし少女は無表情で雪の上に座り込んでいる。

少女は、鈴が鳴るような涼やかな声で、

「探し物はこれか……？ 朝早くから『苦労なことだな……』

今にも折れてしまいそうな華奢な腕。指に何か光るような物を持つて掲げていた。恐らくティファニーのブローチだろう。

カーテイスは暫らく言葉を失つていたが、よつやく声を喉から絞り出した。

「……ああ、そう、それだよ。無くして困つてたんだ。ありがとう、助かったよ……」

カーテイスは、少女の方へ震えながら手を伸ばした。震えている

のは寒さからか、驚きからかは彼には分からなかつた。

カーティスと少女の指先が触れる。カーティスはぎょっとして眼を瞠つた。

手袋^ごしだが、あまりにも冷たいのだ。雪と同等かそれ未満の冷たさ。氷でも触つてゐるかのようだ。

何だこの子は。人間なのか？

カーティスにブローチを手渡すと、少女はもう用は終わつたと言わんばかりに踵を返した。更にカーティスはその姿を見て驚いた。靴を穿いていなかつた。裸足だったのだ。直で雪を踏みしめて丈夫なのかと思ったが、赤くなつてゐるわけでもなく、手足の色と変わらない。

彼はとつさに、背を向けた少女に声を掛けた。

「ね、ねえ！ ブローチを拾つてくれたお礼がしたいんだけど！ 時間、あるかな？」

少女はぴたりと足を止めた。

そして、ゆっくり、実にゆっくり首をひざらに向けた。

「……礼、時間。……構わぬ」

と、单語だけを発した。

その声の裏側に何やらありそつて、カーティスは身震いしたが少女の手を握つた。

やはり冷たく、放しそうになつたが何とか持ちこたえた。彼はこの少女が孤児で森に放置されたのだと思い、少女が了承すればエアルドレッドの屋敷に置くつもりだつた。

手を繋いで歩いていたが、少女は何も喋らない。先程、少女の衣服が余りにも寒すぎると思つたので、首に巻いていたマフラーを差し出そうとした。しかし少女に「要らぬ」と一蹴された。それきりお互い一言も発しない。時間が立つのと比例して、どんどん沈黙が

重くなつてきたのでカーテイスは思い切つて少女に尋ねた。

「ねえ君。……名前は？」

やや沈黙が流れる。

やがて少女は、完璧に整つた顔の一部分の唇を動かした。

「……フェリシア、だ」

3分ほど歩くと、待たせていた馬車が見えてきた。

馬も流石に寒いのか微妙に身体を震わせている。御者もブルブルと震えながら外套をかき寄せている。

カーテイスは長い時間待たせていたことを非常に申し訳なく思い、小走りになつて馬車に近づいた。

「遅くなつてごめんなさい、グレアム！」

大声で御者のグレアムに謝罪する。するとグレアムは顔にパツと赤みを散らせて微笑んだ。

「おお！ カーテイスぼっちゃま！ なかなか戻らないので遭難でもなされたのかと……。もしそうなれば私は腹を切らねばならぬと……。ああ、ご無事で何よりでござります！」

大袈裟だな。グレアムは感涙に咽んでいる。カーテイスはポケットからハンカチを取り出すと、グレアムに手渡した。

「ありがとうございます、後で洗つて必ずお返しいたします」「いいよ、ハンカチならいつでも用意してもらえるし。ねえ、お願ひがあるんだけど、いいかな？」

「はい、何なりと」

グレアムは目元を拭き終ると、ハンカチを丁寧に置んだ。その間にカー・ティスは自分の後ろに隠れていた、少女フェリシアを前に連れ出した。フェリシアを目線を上にあげるよう促す。

「おや、この子は一体……？ それにしてもそのような粗末な衣服とは。乞食ですかな」

グレアムもカー・ティスと同じことを考えたようだ。しかしその明け透けな言い方がフェリシアを傷つけないかと、カー・ティスは内心ヒヤヒヤしながら返事をした。

「いや、よくは分からんだけど……。さっき森で出会ったんだよ。この子も屋敷に連れて帰つてもいいかな」

「はあ……、それは私の権限ではありませんので何とも……。旦那さまに伺うしか……」

言われてみれば確かにそうだ。父上のお考えを拝聴するか。

カー・ティスはフェリシアを押し上げて先に馬車に乗らせる。自分も乗った後、扉を閉めた。

「あ、そうだグレアム。このままエアルドレッドの屋敷に帰らずに、ベックフォードの屋敷に寄つてくれる？ ティファニーに渡すものがあるんだ」

すぐさま「承知しましたあー」と上げ調子な了解の声が聞こえた。きつと鞭を振り下ろす直前だつたのだろう。

パシイツ、と馬を叩く音が辺りに響く。それを合図に馬車が走り出す。

ふとカー・ティスは隣りの少女の横顔を伺う。すると彼女は美しい顔を、苦虫を噛み潰したかの如く酷く歪ませていた。

* * *

ベックフォード家の呼び鈴を鳴らすと、少し時間がかかったが執事が応答した。

ブローチをティファニーに渡してくれるように、と言付けてカーテイスは巻き髪少女の屋敷を後にして。

再び馬車に乗り込むとグレアムが「今日はやけに寒いですね」と声を掛けた。

確かに。カーテイスも、この馬車の中に居るよりも外に出ていた方が、まだマシだったような気がしていた。

フェリシアが乗っているからだろうか。

初対面のときから感じていること。それは、この銀髪少女が「冷気」という見えないオーラを纏っているようだ、ということ。まじまじと彼女を見つめていると、フェリシアは不機嫌になつたらしい。ふん、と鼻をならせてそっぽを向いてしまった。

カーテイスはフェリシアに嫌われてしまったのかと、若干気を落としながら黙つて馬の蹄の音に耳を傾けた。

「着いたよ、フェリシア。ここが僕の家さ。降りようか」

立派な大邸宅の前に馬車が止まる。カーテイスを出迎えようと、数人の侍女が門先で待っていた。カーテイスは先に降りると、フェリシアに手を貸そうとした。しかし彼女が裸足だったということに気づき、傍に控えていた侍女に貴婦人用の靴を持つてくるように指示した。

数分後、侍女が淡い桃色のセミ・パンプを抱えて戻ってきた。

「フェリシア。裸足のままじゃ寒いし、怪我するから靴を履いて。1人で出来るかい?」

貧乏孤児なら、ヒールがある靴など履いたことがないだろうと気が遣う。と、フェリシアはまたもや、ふんと鼻を鳴らして眉間に皺を寄せた。

気遣われたのが気に障ったのか、とカーテイスはこの少女をどう

扱えばいいのか分からなくなつた。

「…………ぬ」

「え？」

「私は靴など履かぬ。人間が作ったという物なら尚更な「そんなこと……。君も人間なんだろう?」

人間なんだろう?

途端フェリシアは、くつつきそうなほど眉根をぎゅっと寄せた。眼も鋭くなり、厳しい険のある表情になつた。

「…………やはり礼や詫びなどろくでもないな。人間など信用ならぬ」

馬車の上から冷たい視線で冷たい声を投げる。

フェリシアが口を開いたとき、カーテイスは吃驚した。

歯が尖っている　　牙が見えたような気がしたのだ。

いやいや。流石に違うよな。瞳も体温も言動もおおよそ人間らしくないが、姿は人間そのもの。しかも怪物や妖怪などいるはずがない。カーテイスは架空の生物は信じない性質なのだ。

気を取り直してもう一度、フェリシアに話しかける。

「そんなこと言わないで。外は寒かつただろう?　屋敷の中なら暖かいから」

すると彼女は、怒ったような哀しくて泣き出しそうな　　。何ともいえない表情をした。

「…………私はあの森を離れられない。私は厳寒の地でないと生きられないのだ」

フェリシアは目の前にある靴を無視して、馬車を飛び降りようとした。

しかし辺りがよく見えなかつたのか、馬車の扉部分にぶつかって悲鳴を上げた。余りに痛かつたのか、その場に蹲つてしまふ。カーテイスは慌てて彼女の顔を覗き込んだ。

「ちよつ、大丈夫!?
どこ打つたの!?

真っ白い顔の額部分が、すこおし赤くなっていた。カーテイスがフェリシアの額部分に手を当てようとする、彼女は細い腕で振り払った。

そして呆気にとらわれているカーテイスをはじめ、周りの侍女たちを尻目に自力で立ち上がる。今度こそ馬車から飛び降りると、侍女たちの静止も聞かず走り出した。華奢な脚だが、恐ろしく速い。あつという間に視界から消えた。あの方向だと、今来た道だからあの極寒の森だろう。

「何なんだ……。フェリシア、君は一体……？」

カーテイスはフェリシアが走り去った方向を凝視しながらつぶやく。

刹那、ゴオオッと強い吹雪が辺りを飲み込んだ。侍女たちが、キヤアッと甲高い悲鳴を上げる。

フェリシアの白銀の髪と同じ色の雪が、更に寒々しい冬へと誘う。「さあ、カーテイスさま。お部屋に入りましょう。遅くなりました
が朝食もご用意してござります」

侍女の一人が雪から眼を守るために、眼を窄めながらカーテイスの背中を押した。

カーテイスは促されるまま、暖かい屋敷へと戻ったのだった。

木々が今日はやけにざわつくな。

ああ、そうか。今田は何故か吹雪が強いのだ。

濃蒼色の瞳の少女 フェリシアは生まれ育った森に戻つてきた。長い白銀のセリセリと風に靡かせながら。いつものように雪の上に座り込もうとする。すると急に左眼に激痛が走つた。

左眼を押さえて蹲る。心臓がドクンドクン、と強く激しく脈を打つているのが分かる。

しばらく激痛に耐えていると、少しずつ痛みが緩和されてきた。フェリシアは立ち上がり、傍の木に凭れかかった。

その衝撃で、枝に引っかかっていた雪たちが髪の上に舞い落ちてきた。

フェリシアは冷たさというものには強く対して気にはならないが、そっと頭の上のものを払いのけた。

「あいつ」がいなくなつたのも、こんな風に白銀が美しく映える日のことだつたな。

「はやく姿を、無事な姿を……。私はお前に逢つまで死なぬ。死ぬことはできぬ。何故なら『白銀』^{詰り}を失つてまで、私を護つてくれたのだからな……」

白銀の髪の少女は、今なお雪を生み出している空を仰ぐ。弱々しく手を伸ばしたが虚空を搔くばかり。

フヨリシアの「右頬」には、透明な涙が伝っていた。

神よ。我らを創りし神よ。どうか、もう一度あいつに。あの莊厳な姿に。

「もどらせてくれ……」

* * *

カーテイスはその日も、勉学に励んでいた。

政治に経済、物理に科学に数学に至るまでありとあらゆる分野の知識を頭に柔軟に叩き込む。

カーテイスには既に2人の兄がいる。しかもどちらも屈強な父に似て頑丈な体躯をしている。長男か、長男が不幸なことになれば次男か。どちらにせよ、カーテイスが跡継ぎという可能性は低い。

次兄は、長兄がエアルドレッド伯爵となつた暁には、国王陛下直属の軍隊に入隊するつもりらしい。貴族の子弟は、よっぽど無能ではない限り、尉官や佐官以上の上級将校の地位が約束されている。

要するに軍か学か、どちらかで身を立てていくのだ。

そして三男であるカーテイスは後者を選ぶつもりでいる。兄たちのように力がないことはもう十分分かりきっているし、何より軍人というものが苦手なのだ。

兵器を使いこなせる自信も、傷つき流す血を無心で眺めていられる自信もない。誰かの命を奪うということはどうしてもやりたくない。そして「祖国のためだ、国王のためだ」という覚悟も恐らく出来ない。陛下の御尊顔は肖像程度で、直に拝見したこともないのに、尊い命など捧げられるものか。口に出せば貴族社会から煙たがられてしまうだろう。だから漏らしはしないが、軍人、軍役などはごめ

んだ。

次兄は過去の軍書を読んで、心が勇み震えたという。だがそれは実戦に出ていないからだ、とカーテイスは思っている。大きな砲弾や破裂音が飛び交い、冷静にいられる人間がいるものか。「勇み震える」は「恐れ慄く」に変化していくに違いない。

「戦争や恨みごとがない世界に変えられる人になりたい」それがカーテイス心からの願いで、夢だ。だから色々な方向から物事を捉えることを可能にするために、膨大な知識を身に付けているのだ。貴族だからって優遇されたたくない、実力で未来を切り拓きたい。

「戦争のない世界」……綺麗ごとなのも分かつていて。この世には何万という膨大な数の人々がいる。その何万が1つの考えにまとまるなどあり得ない。違う思いや意見を持つていて当然だが、それが静いになり、国単位の戦争に発展していくのを食い止めることが出来たら……。命を捨てて国を護るより、話し合いや外交で国を護るほうが何倍も格好いいに決まってる。カーテイスはそう確信していた。

外国の読解不能の書物は、それぞれの教科の教師に訳してもらおう。それは教師もカーテイスも難儀したが、得られるものは少なくない。

今日の分の勉強が済むと、もう日が落ちようとしていた。ぶつ通しで4時間弱机に向かつてていたということになる。毎日フラフランなるが、確かに手応えは日々感じている。

頭が疲れて痛くなつてきたので、カーテイスは自室の寝台に倒れこんだ。夕日が放つ淡い橙が優しく癒してくれる。

少し睡眠を取ろう、とウトウトしている状態のとき、扉を叩く音が聞こえた。

はい、と返事をして寝台から起き上がると、遠慮がちに扉が開いた。

「ジュリアナよ。……お時間はあるかしら？」

金色の髪を見事に結い上げたジュリアナだつた。

「ごめんなさい。お疲れのところを邪魔してしまつて」

カーテイスの自室に入り、扉をまた遠慮がちに静かに閉めた。

この姉は、たとえ相手が弟であつても丁寧な態度と言葉づかいをする。もともと斟酌をする人物ではあるのだが。

「いいえ、邪魔ではありませんよ。それより姉さま、どうなされたんですか？」

しつこいようだが、確かにジュリアナも今ダンスのレッスンに忙殺されているはずだ。そのジュリアナがわざわざ弟の自室を訪れるなど、何かあつたのか。

「ええ……。もしかしたら私の勘違いかもしねないのだけど。……最近貴方に元気がないように見えて。それで、心配になつたの」

ジュリアナは長い睫毛で目を伏せながら、手近にあつた椅子に腰かけた。カーテイスも向かい合わせになる体で椅子に座る。

「私の見間違いだつたらごめんなさい。でも普段元気なカーテイスがつらそうなのは、私もつらくて。もし、話せることなのだつたら、私に話してほしいなつて」

ジュリアナはよくこの弟・カーテイスのことを見ているようだ。自分でも出していないと思つていた細やかな感情の変化を感じ取れるとは。

「元気がない」 思い当たるのは……。

人間離れした少女・フェリシアのことだ。

カーテイスはあのとき

森で、フェリシアの手をとつたとき

フェリシアから受け入れられたと思つていた。それが2回も鼻であしらわれ、拳句の果て「信用ならぬ」と言つて走り去つてしまわれては、傷つく。誰であつても。……と思つ。

しかしそれを他人に言つるのは憚られた。何故か、とは言い表しにきが、とにかく誰にも彼女の存在を広めたくなかった。

カーテイスは出来るだけ明るい表情になるように努めて答えた。

「大丈夫です。僕には何の心配も悩みもありませんよ。ただ強いて挙げるなら、『童顔』からおさらばしたいのですね」

『童顔』。これはカーテイスのコンプレックスのひとつだ。ジユリアナは、ふつと吹き出すと手で口元を押された。それすらの動作でさえ、優雅で気品が漂う。

「そう。なら良かった。だーいじょうぶ。童顔なら時間が立てば何とかなるわよ。父さまも母さまもお綺麗な方でいらっしゃるしね」ジユリアナは最後に弟を抱きしめる。抱きしめる腕はカーテイスと変わらないか、カーテイスより細い。カーテイスも姉の背中に腕を回した。姉の滑らかな金髪が顔にかかる少々むず痒かった。

* * *

そのころフエリシアはまた、左眼の眼痛に苦しめられていた。最近どうも激痛の頻度が増え、間隔も短くなっている。

しかし薬はない。だから黙つて耐えているしかない。

痛みの最中には、脳裏に何かが浮かび上がってくる。何かの、断片のような。

ほどなくして痛みが落ち着いてくると、フエリシアは目をそつと閉じた。途端世界は真っ暗な何もない世界へと切り替わる。いつまで、私は。

「孤独でいればよいのだ……。これも撻を破った罰なのか……？」

目を開ける。見ると、一度止んでいた雪が、再び降り出した。フエリシアにとつて雪ほど心地よいものはない。

木々に凭れると、雪がフエリシアの全身にかかり、やがて自然と

敷布のようになる。

そういうえば、あの数日前に出会った少年。変におせつかいなヤツだったな。……私は違つ、きっと常に誰かに囮まれて過ごしているのだろう。私のことなど、とうに忘れて。

自分から蹴つたくせに、何だか寂しくなつてきて。フェリシアはぶんぶんと頭を振る。乗つていた雪はハラハラと舞い落ちて、地面の雪と同化して分からなくなる。

陽と月が交代した。これからは漆黒の闇が広がつていく。

フェリシアは激痛に襲われた疲れのせいか、痛みから解放された安堵のせいか、目を閉じるとすぐに意識を手放した。

そもそも私は今までずっとひとりぼっちだったではないか。その私が『寂しい』という感情を持つわけがないのだ
……。

『生きる。生き続けるのだ。我の分身よ。誇りを失わなければ、いざれきっと……』

嗚呼、そんな日は、果たして訪れるのだろうか
……?

雲の切れ端まで隅々みえる。草木がかすかに揺れる程度に風が吹く。鳥たちが木や空で大合唱。

そして、最近灰色一色だつた空に、色鮮やかな青が戻つた。そう、今日はこの寒い地方じや滅多にない、晴天の日だ。

雲や霧に邪魔されず、本領發揮の太陽から光が溢れ漏れだしている。それは、カーテンを切り裂く勢いで、窓から差し込む。本来なら踊り子ならば、舞の一つや二つ舞うところなのだ。

が。……カーティスはそれのおかげで目が覚めた。

カーティスの場合、一度目が覚めるとスイッチが入つてしまふのか、二度寝は出来ない。侍女や教師は褒め称えてくれるが、ティファニー曰く「二度寝より心地よいものはないよ」。カーティスはないの？ エフ、できないの？ ……へー、すごいね。 ねえそれって嫌味？ らしい。このティファニーの後者のひねくれ具合は、後ろにブライスが立つていたからだろう。

自分の体温ですっかり温かくなつた布団を剥いで、もそもそと寝台から下りる。枕は寝るときと変わつていない。寝相は良すぎるので。……とティファニーに言つてみたら睨まれた。

ああ、今日は正直ゆっくり寝ていたかつたなあ。昨日はあんなに遅かつたんだから。

というのは、昨日プローチの礼で、ティファニーが訪ねてきたからである。

「カーティスさま。先日は寒い中御手を煩わせてしまい、大変申し訳ありませんでした。……ほら、お嬢さまからもきちんとお礼と謝罪をなさい。カーティスさまにご迷惑をたあ一つぶり掛けたのです

からね「

『たっぷり』をかなり強調する背景には自分の失態を巻き髪少女に理解させるためだろう。

黒縁メガネでティファニーを叱る様は、家庭教師そのものだ（実際そうである）。

ブライスさんって……、役にハマリすぎ。

カーティスは、苦笑いで子爵令嬢ティファニーと家庭教師ブライスを眺める。

「お嬢さま。前にしつかりお立ちになつて。……何をなさつておいでなのですか？」

ティファニーはブライスの後ろで、何やら指を『j』によじりと動かしていた。ブライスの背中に垂れた黒髪を指に巻きつけているようである。呆れ顔になつたブライスはティファニーの腕を、強引に引っ張つてブライスの前に立たせた。

ティファニーは顔を上げず、床を睨み付けている。

「……お嬢さま」

これで何度もなのか分かつているのか、と言わんばかりのため息で、ブライスはティファニーの肩に手を置いた。

それでもティファニーは視線を上げない。よく見れば、大理石の床に粟の粒が。

上げられなかつたのだ。ティファニーの小さな身体は小刻みに震え、小さな嗚咽が漏れていた。

カーティスはそんな従兄妹を見て、腰を落とした。目線を合わせるために。

「ティファニー。もう泣かないで。……ブローチなら戻つてきたじやないか。ね？」

優しくあやすように声を掛けてやると、ティファニーの堰は切れたようである。本格的に泣き声を上げ始めた。

カーティスは巻き髪少女の濡れた目元を拭つてやる。しかし拭いても拭いてもその目元は乾かない。

「どうしたの、何か傷ついているのかい？」

「……ウウツ、だつてえ……ヒツ、う、カー・ティス、怒つてたじやない。……フツう、あの食事したときい……。すつじく、すつじく怒つてたじやない。……ティファニー、……どうあやまつていいのか、……分かんない、の……」

食事のとき？ ああ、そうか。ティファニーは、

「勘違いしちやつたのか。違うよ、ティファニー。あのときはね、怒つてたんじやないよ。君のブローチのことが心配だつたから……」
ティファニーのブローチをカイルが外で失くしてしまった夜の食事のとき（ジュリアナの誕生日）。ブローチはティファニーの祖母の遺品で、大変高価な物である。だが、それ以前にベックフォード家、おばあちゃん子だったティファニーの大切な物だと知っていた。だからもし、誰かに盗られてしまつたら。そのまま見つからなかつたら。とカーティスは心配していたのである。それでつい、難しい顔をしてしまつていた。それを見たティファニーが「怒つてる」と、思い間違えたのだろう。

普段温和なカーティスが怒るなど、ティファニーには信じられない。だから、どう謝ればいいのか、分からなくなつてしまつたと、涙ながらで話すティファニーの言葉からカーティスは繋ぎ合わせた。

ブライスはそつとティファニーの肩から手を外した。

「バカだねティファニー。僕はそんなことで怒つたりしないよ。……

怒つてないから泣き止んで」

「……本当に？」

ティファニーは目を潤ませながら、小さな声で問い合わせ返した。

「ああ、本当さ」

微笑みながら抱きしめてやると、ようやくティファニーは落ち着き始めた。

腕を解いて立ち上げると、ブライスがそつとカーティスに囁いた。
「……流石ですね。素晴らしい。このお嬢さまの憤懣を爆発せずに慰撫できるとは。屋敷中を探しても、貴方様に勝る方はいらっしゃ

いません。素晴らしい、実際に素晴らしい。私も見習わせていただきます」

素晴らしい、素晴らしいと連呼するさまは、日頃巻き髪少女にだけ手を焼いているかをよく表していた。

ブライスさん、必死になりすぎる駄目ですよ。押しちゃダメです、引くんですよ。

と余計だろうが（ブライスはプライドが高い。ことに教育に関しては）つけたしてやると、ブライスは意外に、「非常に参考になります。ありがとうございます」と一礼してみせた。

……その後ティファニーはベックフォード家に戻るのかと思いま
や、

「ティファニー、今日はカー・ティスの屋敷にいたい！　だつてベックフォードに帰つても誰もティファニーの話聞いてくれる人いないんだもん……。ねえ、ブライスいいでしょ？」

来たときは打つて変わつて、ティファニーは笑顔全開だ。

しかし、ブライスは顔面にレンガをくらつたような顔をして、動かなくなつていた。これは恐らくショックを受けている顔だ。「話を聞いてくれる人がいない……？　おかしい、私は毎日聴いて差し上げているのに……」とブツブツ呟いていたので、カー・ティスは必死に執り成した。

「そんなわけないだろ、ティファニー。ブライスさんだつてちゃ
んと……」

「ううん。ブライスはすぐ『消灯の時間です。おやすみなさいませ』だけ言つてすぐ電気消しちゃうんだもん」

言葉を用意していたかのように、カー・ティスの言葉を途中でぶつた切つた。

ブライスは完全に固まつているのを見て、カー・ティスはまた苦笑い。

……ベックフォード家からも「アーラドレッド家からも」了承を得て、

ティファニーはエアルドレッド家で一夜を過ごすこととなつた。

しかし、結局はティファニーはベックフォード家に戻ることになつた。

それは深夜のこと。

年が離れているとはいって、カーティスとティファニーは異性なので同じ部屋で寝るわけにはいかない。そこで、ティファニーはジュリアナと一緒に就寝することになったのだが……。

カーティスが夢の真っただ中にある中、扉を遠慮がちに叩く音がした。寝ぼけながらでも何となくわかつた。この叩き方はジュリアナだ。で、ジュリアナがカーティスに用があるとすれば……。

「……ティファニーか」

予感は見事的中。ジュリアナが部屋に入ってきたとき伴われていたのは。

「夜分遅くに申し訳ないわね。……でもティファニーが

「……ティファニー。何があつたんだよ……」

ティファニーは何故か泣きじやくっていた。目元は腫れているような気がする。

ティファニーが泣いて答えないでの、ジュリアナが代わりに答える。

「……家が恋しいみたい。ブライス、ブライス、つて呴いていたから……」

何だから言つて、やつぱり頬りになるのはブライスさんじゃないか。

「どうする？ ティファニー、ブライスに迎えに来てもらひつ？」
ジュリアナが訊くと、ティファニーは僅かながら首を縦に動かした。

ジュリアナは執事を起こし、ティファニーの迎えを寄越すようにとベックフォード家に連絡を入れさせた。

ティファニーが馬車で帰るのを見届けると、カーテイスもジュリアも倦怠感が襲つてきた。それもそのはず、今は真夜中なのだ。しかもジュリアナはティファニーがグズつているのにも付き合つていたため、疲労は甚だしい。

「カーテイス、もう寝ましょう。おやすみなさい」

「おやすみなさい、姉さま」

こうして2人はそれぞれの寝室に引き上げて行った。

……というわけで、今日はぐっすり眠つて朝寝坊していたかった。執事がその旨伝えてくれて居るはずなので、カーテイスもジュリアナも今日は朝食は遅くとも構わない。

「……とはいって、二度寝は出来ないからなあ……。よし、起きるか」

朝食を食べに食堂へ降りると、ジュリアナはもう食事を開始していた。

「おはようございます、姉さま。お早いですね」

「あら、おはよう、カーテイス。実は私も寝られなくつてね」

ジュリアナは微笑むと、カーテイスに向かいの席に座るように促した。カーテイスは素直にそれに従つて椅子に腰かける。ナイフとフォークを握つて、食物を口に運ぶ。

今日の朝食は、朝遅いこともあつて少なめに摂つた（昼食が食べられなくなるので）。

「昨日はお互に大変だったわね。今日はゆっくり休んでちょうだい。

……あら

「どうかなさいました？」

「ええ、今日は雪が溶けてるな、と思って」

ジュリアナが窓の外に視線を向けたので、カーテイスもそちらを

伺う。

白銀の雪はほとんど溶けかけていて、新緑の草がちらほら見える……。つて、

カーテイスはまだ朝食途中なのに、ナイフとフォークを叩きつけるようにして食堂を飛び出した。

「え！？ ちょっと、カーテイス！？」
ジュリアナの絶叫が後ろで響いていた。

「グレアム！ グレアム！ 急で悪いけど馬車出してくれ！」

馬小屋で馬の毛並の手入れをしていたグレアムは、カーテイスの声に振り返った。

「はあ、いかがなされたのですかな」

「いいから、今すぐ！ 行先は前の森で！」

急いでいるというのに、このグレアムの鈍感さは若干じれつたい。が、従順なグレアムはカーテイスの顔色に気づき、弾かれたように慌てて馬車を出してきた。

カーテイスはそれに乗り込むと、森へ急いだ。

白銀髪の少女 フエリシアがいる森へ向かって。

1・4（後書き）

急いで書いたので、誤字・脱字があるかもしれません、大目に見て下さい。

『行くな、何処へも。……お前だけは』

『ああ、いとも。私たちは、2人でひとつなのだから』

『……私たちにとつて、幸せとは何なのだろう』

『はたして幸せはあるのだろうか』

『…………いつまでも……共に』

* * *

「ああ、もういいでいい、降ろしてくれ！」

森まではまだ少しはあるが、カーテイス自身の疼きが声を作つてい
た。

えつ、ここで？ とグレアムが言つより早くカーテイスは馬車から転がり出た。その弾みで、靴先を扉付近で思い切りぶつけてしまつたが、痛みを知覚野にのぼらせる時間を与えている暇はない。

今日より澄みわたつた空を、カーテイスは生まれてから見たことが無い。いつもは寒くて凍えてしまいそうなのを防ぐために着こんだ服は暑くてしうがないくらい。走りながら、身体中が汗を吹き

だしているのが分かる。

数日前まで雪しかなかつたくせに、あんなに積もつていたのに。快晴だからとはいえ、何でたつた半日程度で溶けかけようとしてるんだ。

『私は厳寒の地でなければ生きられないのだ』

哀愁を漂わせながら、そう呟いた少女の顔が忘れられない。頭からこびり付いて離れない。

その姿を脳裏に思い浮かべると、不安で心配で。

雪の彫刻で創られたかの如き少女は、溶けていないだろうか、と。

「フヨリシア！ 畏はどこにいるんだー？」

カーテイスの悲痛な叫びは、木々が空気を吸つかのように吸い取つてしまつた。

銃身から飛び出た弾丸は、真っ赤な血を引きずり出した。

一瞬だつた。

生まれ持つた素質と、鍛えぬいた反射を持つてしても視界に捉えることは出来なかつた。

何がどうなつたのかは理解できなかつた。

片手で片眼にそつと手を当てる。その手に染みついたものをもう片方の眼で見つめる。

そのとき初めて何が起つたのかが分かつた。脳が、そして身体

中が全てを理解した。しばらくの間沈黙していた痛みは、患部に集中する。

『フヨリシアツー』

甲高い悲鳴が辺りに響くが、そんなことにまで精神を割けるほど、この身体が頑丈でないことを思い知る。

なんだ、所詮やはり寿命ある生物だったのか。それでは生み出された意味が。

『おのれ、よくも――！ 思い知れ、下劣で下等な者よー。』

駄目だ、そんなことをしては。

薄れゆく意識の中で、感情に任せて暴れまわるもう一人の自分をみた。

そこにいたのは人々が魔界の住人と恐れ、蔑んできた獣の姿であった。

感情を制御する機能が備わっていない獣は、暴れ狂い己の全てを出し尽くすまで止まるのではない。たとえ、同胞であつたとしてもくい止めることは不可能だ。

誰であつても暴走を止められない。それ故に、獣と畏怖されるのだ。姿だけでなく、中身までも狂暴な血と細胞で埋め尽くされているのだと。

しかし、それではいけないのだ。

それでは、我らはこれからもずっと誰からも信用されない。

助かるために、生きるために、折れることは必要なのだ。怒りや憎しみといった感情を手放さなければならぬのだ。

『……何といふことを。やはりお前らには無理なことであったか。

……咎人は消え去るほか道はない――』

やめてくれ。そいつを私からとらないでくれ。

私にはもう何もない。何も、誰かのぬくもりでさえも。

一人でずっとずっと共に寄り添い、生きると約束したのだ。だから……。

「私たちを離れさせないでくれ、孤独は嫌だ、独りにしないで……！」

* * *

森を走り回つてようやく見つけた。

自らをフェリシア、と名乗り、雪のように冷たい少女を。

彼女のそばに慌てて駆け寄ると、白銀の髪の少女はカーテイスに抱き着いた。というより縋り付いた。

「孤独は嫌だ、独りにしないで……！」

彼女は泣いていた。水が氷を溶かしてしまつかの如く、大粒の涙が頬を伝う。普段は真っ白な顔を真っ赤に染め、声を押し殺しながら泣く少女は、どこにでもいる普通の少女と変わらない。しかし、カーテイスはあることに気付いた。

右眼からしか涙が出ていないのだ。左眼からは涙の一滴、いや液体の前兆すらない。

すると、カーテイスに抱き着いていた重さが更に一段と軽くなつた。フェリシアの身体の力が抜けたようである。

「フェリシア……？」

彼女は気を失っていた。右の睫毛に涙を残して。カーティスはそつとそれを拭つてやつた。

どのくらい一人はそうしていただろう。

ふとフェリシアは自分の近くに温かいぬくもりを感じて目をそつと開けた。どうやら泣いていたようで右の目元が腫れて少し痛い。隣りにいたのは、

ああ、きててくれたのか。待ち焦がれた、再会の日。もう孤独に震えることはないのだな。

か細い指で、目を閉じている彼の顔にそつと触れる。壊れて消えてしまわないように、優しく。

自然と涙が零れてとまらなかつた。ずっと逢いたかつた。逢いたくて逢いたくて。でも、これからはずつと一緒に。もうこれからは、「…………離れないからな」

「隨分と大胆だね、フェリシア」

？ 声が違……？

「！－？？」

フェリシアは目を瞠つた。何故だ。さきほどまでここにいたのは……。

「あつはは、女性にこんなに思い切り抱き着かれたことないからねえ。とりあえず離れる? このままでいる?」

みると、身を乗り出して自分がカーティスに馬乗り状態に近くなつていた。フェリシアは慌てて飛びのいて、目の前の少年から素早く距離をとつた。

「なななな、何で貴様がここに……！？」

顔を林檎色に染めて、パニックを起こしているフェリシアにカー

ティスは笑つて答える。

「いやあ、今日は晴天だから雪」と君が溶けちゃわないかつて心配になつて飛んできたんだけど。いきなり飛びついてきたからビックリしたよ。そのまま君が寝ちゃうから、僕も君が目覚めるまで一緒に寝てたつてわけ」

「……」

フェリシアはどう反応していいかさっぱり分からず、ただただ閉口した。

「結構寝心地良かつたよ、柔らかかつたし。まさに白いクリームみたいにや」

「だだだだ黙れっ！ 私は断じてそんな破廉恥なことは……！」

フェリシアは反駁する力を取り戻し、手近にあつた、雪玉をカーティスに思い切り投げつけた。しかし、彼はそれをいとも簡単に避けてしまう。

「してないっていうの？ 自分から抱き着いてきたくせに？」

そこを突かれると痛い。しかし途中からの記憶が、誰かに封じられてしまつたかのようで全くな。

フェリシアが撃沈すると、カーティスは笑つて彼女を引き寄せた。抵抗してみたが、上手く力が入らない。

カーティスの腕にすっぽり収まる、フェリシアは途端に大人しくなつた。剥き出しの華奢な肩が小さく震えている。

カーティスは雲が珍しく少ない澄んだ空を見上げながら、問うた。

「……つらいことがあつたの……？」

フェリシアは、肩を震わせるだけで何も言わない。右眼から転がり落ちた涙が、ポト、と地に落ちる。

瞬間、雪が刃のように堅く鋭く凍りついた。それは線が走るよう

に伝線し、辺りを雪ではなく氷に造り変えていく。

スケートリンクになつた場を、カーティスはしばらく瞠目してい

た。しかし少し時間が立つと、シユウツと音が鳴り初め

地に吸い込まれて、辺りは完全に元の雪景色に戻つた。

水は

「……フェリシア、そういうえばまだ君にプローチのお礼をしていなかつたよね。何か欲しいものとかない？」

フェリシアが落ち着き始めるのを見計らつて、カーテイスは小さく声を掛けた。

フェリシアが腕の中で動かず喋らずなので、カーテイスは何か外しあるうか、と少し心配になつてきた。

「…………い」

「え？」

余りにも突然で消えそうな小さな声だったので、カーテイスはフェリシアの声を聞きそびれた。

もう一度言つて、と頼むとフェリシアは少々不機嫌になつたよう

で、カーテイスの胸を思い切り押して彼の腕から逃れた。

濃蒼色の瞳は真つ直ぐに見据える。そして、先程のべそとは打つ

て変わつて居丈高に声を張り上げた。

「私の願いはただ一つ！ 探してほしいことがあるのだ。お前、私と共に探してくれないか」

白銀の髪が、一本一本獣のように逆立つてみえた。

1・5（後書き）

更新のりまですみません。
期末やつとこさ終わりました！
もう勉強なんてしたくないっ！

人間など絶対に信用しない。できるはずがない。

何故なら自分から大切なものを奪つたから。人間がに足を踏み入れたせいで、彼の森から生物は消えてしまった。我ら種族を残して。白銀は我らの象徴であり、誇りである。それを失わされた。愚劣な奴らにだ。しかも奴らは、あいつまで。あいつにまで傷を負わせたのだ。

あいつは今もきっと何処かで、独りで耐えているのだろう。あの時交わした、実現しない約束を守るために。

「…… おま。お密おま。」注文の品をお持ちいたしました

ハツと顔を上げると、盆に飲み物を乗せた女性店員が立っていた。肘をついて考えごとをしていたので店員が来たことに気付かなかつたようだ。女性は職業柄上、終始にこやかな表情を保つていたが、眼が笑つていなかつた。どうやら相当イライラしたらしい。

すみません、と小さく首を下げると店員は勝ち誇つたような笑みを浮かべて去つて行つた。サービスが命の喫茶店のくせに。どんな躊躇されてんだ、と店員が去つた方向を睨み付ける。その時目が合つた小さな女の子が、ビクッと顔を引き攣らせて泣き出した。母親らしき人が「どうしたのエメリン。何怖いものでも見たの？」

癒されるために来たつづーのに、何でこんな胸クソ悪い目に。氣分を害し、運ばれてきた熱い紅茶を一気に飲み干す。バン、とカップをテーブルに叩きおくと、周りの客が一斉に静まり返つた。好奇心のある者は何事か、とチラチラとこちらを伺う。

見るんだつたらこそそしないで、凝視すりやあいじやねーか。

とさやくれながら大股で店を出る。ちょっとした気まぐれでガラスドアごしに店内を見回すと、皆安堵したかのように笑顔で談笑を開していた。

人間はこれだから嫌なんだ。度胸もないくせに、安心と平和だけを貪り求めやがる。しかも『自分さえよければいい』としか考えてないから余計に性質が悪い。

眉根を寄せながら街を歩くと（この街は人々で賑わって、酷いときには身動きがとれなくなると有名）、一瞬で自分の周りから人だかりが消えた。男女問わず道の端で立ち止まり、こちらを凝視しながらヒソヒソと囁きあつてゐる。そいつらの顔の醜さといたら！こんな奴らの顔がよく劇や店のポスターにのれるな。人間社会の『美』の基準は、全くもつて理解不明である。

舌打ちをしながら歩き続けると、やがて田舎での店についていた。

相変わらず陰気くさい店だな。

明るく賑わう店たちから弾きだされたようこ、ひつそりと開店看板を掲げているこの店。

日陰に建設されているためか、湿つて苔や薺が群がるように蔓延つてゐる。掃除していなかと不潔に思われがちだが（思う人はいるのだろうか）、『幽霊屋敷』と噂されるこの店にはこの程度の方が、適格な雰囲気を醸し出していると思う。

帽子の上に落ちてきた埃を払い落しながら、腐りかけている木のドアを押した。するとギギギ……、と不吉な音を立ててドアは珍しい客人を招き入れた。

「おお、旦那あ。遅かつたですねえ、待つてたんですよ」

滅多にない来客に顔を綻ばせるは、この店の亭主と思しき男。中年で中肉中背。眼は萌黄色の若干つり目。笑つと出来るえくぼが、彼を狐に近づけさせる。

「あれは終わったか」

声のトーンを落として喋るとたいてい怖がられるのだが、この狐亭主は全く恐れない。

「ええ、終わりましたよ。今お返しいたしますね」

使い古した木の香りがする木製の棚がある。その棚には、怪しげな霧囲気の薬品や鉱物が無造作に収納されている。いや、無造作ではないようだ。その証拠に狐亭主はそこにひとつ、迷わずひとつ置き場から何かを手に取った。

それを丁寧に大事そうに、血管が浮かび出たじうじうした手に包む。

狐亭主が歩くと同時に、所々苔が生えた木の床がギイギイと音を立てた。

「どうだ」

すると狐亭主は、指に鉱物のような物を挟んで透かしながら、「はあ、鑑定はしてみたんですけどねえ。何せこここの機械も古いですし、何より俺も見たことがねえんでねえ。店中の図鑑を漁つたんですけど、判別がつきませんでした」

客人がギロツと睨んだが、狐亭主は意に介する風もなくのんびりと笑つて見せた。

「まあ俺にはよく分かりません。鉱物学者の女房なら分かつたかもしないですがね。残念なことに15年ほど前に死に別れてしまいましたが」

全く表情を変えずに、二コ二コ顔の狐亭主。客人に雪で創られたように白く染まつた鉱物を手渡す。客人はそれを受け取る。そのとき、狐亭主は瞠目した。

穢れのない純白の鉱物が、客人の細長い指に触れた途端、血のような濃い赤に染め上げられていったからだ。

普段は驚きを顔に出すことのないのだが、流石に今回ばかりはそうはいかなかつた。

息をのむ氣配が伝わったのだろう、客人は美麗な顔を酷く歪ませた。

狐亭主は場を執り成そうと、努めて明るい表情と声で、

「いやはや、素晴らしい鉱石ですな。貴方さまを主人と認めている
んでしような。それにその色は旦那の赤い髪とお揃いで……」

その時、狐亭主は目の前で確かに見た。

幼い子供のこひ、母にいつて聞かされ恐れ震えあがつた『悪魔』
を。

もう近頃は全く無縁だつた焦りと汗が大量に噴き出た。

「……赤髪とお揃い、か。途中で口を噤んで正解だつたな。
もし『似合つてゐる』とでも言つていよるものなら……」

お前は今、屍と化していたぞ。

赤髪が逆立ち、かぶつていた黒い帽子が床に落ちた。

切れ味最恐の眼のナイフで屠られたように、狐亭主は己の内臓から血が噴き出してきたかのように思えて、思わず片手を腹に当てた。燃え盛る火の髪と夜の月のよつた冷淡な濃蒼色の瞳が、こぢらを噛み殺さんとばかりに激しい憎悪を丸出しにしている。

狐亭主は恐ろしさのあまり、しばらく沈黙していた。しかし悪魔だつたとしても客は客。汗をさり気無くふき取ると、軽く会釈した。やがて赤毛の客人は、あけすけの憎悪を引っ込めるに平常の顔に戻つた。

狐亭主は少年のようだと思つた。客人は背の高さと体格の良さで歳が読みにくかつたが、顔には少年の香が残つてゐる。『悪魔』を見た後だったので、落差が大きかつたためだろう。

客人が帽子を拾い上げて、目深にかぶる。そのまま踵を返して木の（腐りかけ）ドアを押したので、狐亭主は慌てて声を掛けた。

「ありがとうございました。またのご来店お待ちしております」

頭を下げ、眼でちらりと客人を見遣る。

すると客人はもう既に店を去つたあとだつた。

三脚テーブルに、鉱物鑑定代を置いて、銀のコインが何かを伝え
るように、眩しく光つていた。

「何なんだよ、フェリシアの奴っ！」

家路につき屋敷の自室に戻ったカーテイスは、珍しく荒れた仕草で扉を閉めた。

誰に対して愚痴かといえば　　言わずもがなの白銀の髪の少女、フェリシアだ。

あのあと　　フェリシアに抱き着かれ、「探してほしいことががあるので、一緒に探してくれないか」と言われたあと。

フェリシアにはこつぴどい態度ばかり受けていたので、カーテイスは心が寄つてくれたのかと正直嬉しかつた。

しかし彼女は突然地面にうずくまつた。左眼を強く押さえていた。詳しいことは不明だが、どうやら左眼が急に痛み出したらしい。

カーテイスは慌てて抱き寄せて顔色をみようとしたが、フェリシアはぐつたりしていた。意識がなかつたようであつた。カーテイスは驚いて、飛びつくようにフェリシアの脈を調べた。首はあまりにも冷たかつたので、手首に触れて脈を計つた。何処が脈打つ血管なのかいまいち分からなくて、しばらくあたふたしたが、指先に伝わる鼓動を感じると、ほうっと息を吐いて安堵した。

それからしばらく、フェリシアは目を覚まさなかつた。カーテイスはフェリシアの長い睫毛を眺めながら、複雑な想いで彼女が目覚めるのを待つた。

カーテイスは退屈になつたので、フェリシアの長い白銀の髪を弄んでいると、

『……何をやつている』

フェリシアが、不機嫌そうに非常に不機嫌そうに低い声を出した。閉じていた瞳は両方ともぱっちり開いていて、カーテイスをぎろ

りと睨んだ。

カーティスは苦笑いしながら、『あんまり綺麗だったから、つい。ごめんね』と謝った。

すると、フェリシアは力のない細い手でカーティスの腕を振り払つた。全く痛くなかったが、カーティスは思わず腕を引っ込めた。フェリシアのその手は、はつきりとカーティスを拒絶していた。フェリシアは立ち上ると、カーティスに背を向けた。そして小さく、

『……去れ』

カーティスは聞き間違いかと思った。だつてさっきまであんなに僕に、心を許してくれていたじゃないか。なのに、何故急に手の平を返すようなことを言うの？

愕然とするカーティスにフェリシアはさらに追い打ちをかけた。

『去れ、と言つたのが聞こえなかつたのか？……私はお前が』

そこでいつたんフェリシアは言葉を切つた。

ファリシアはぐるりと半回転して、カーティスに向き直つた。

『嫌いなのだ』

声の軸を微動だにせず、はつきり彼女は言い切つた。

その瞳は、何かを強く激しく恨んでいるような、もう一度と取り戻せない何かを悼むような、複雑な色を帯びていた。

1・6（後書き）

大変遅くなりました。

理由は沢山あるのですが……。

一つの大きな要因としては、校内駅伝・マラソン大会があつたからです。

寒い中の長距離は大嫌いです。

来年もあるなんて、嫌だああああああああ

!!

その日、彼女は階段を上っていた。両手に一冊の本を抱えて。長い長い階段をようやく登り終えると、ジュリアナは軽く肩で息を吐きながら、部屋の扉を細い腕で開けた。

途端、視界には沢山の本たちが飛び込んでくる。

そう、ここにはエアルドレッド屋敷の図書室。図書室にしては広すぎる気もするが、隙間は全くなく本棚が部屋の空間すべてを埋め尽くしている。

「同じ年頃の子弟なら遊びほうけているのに。あの子が無駄に時間を使っているのは見たことが無いわ」

今までびつしりと本が詰まつた、高い本棚を見上げながらジュリアナはほうっと息をついた。彼女が気に病んでいるのは、弟・カーティスのことである。カーティスはずつと勉学に励み（まくつて）、最近よく図書室に通っているというのを、弟専属の侍女に聞いたのである。図書室に来るたび、弟の熱心さを想いだし、頭が下がる。ジュリアナは借りている本があつたので、図書室へ返しに来た。別に期限などはないし、気に入った本ならば返さなくとも支障はないが、ジュリアナは「もし、私のほかにも読みたい人がいるかもしれない」と考え、毎回毎回返しにくるのだ。兄たちによく「あれだけ膨大な本があるのだし、使用するのも我が屋敷の人間だけで興味は皆違うのだから、そういう心配はしなくていい」と笑うが、ジュリアナはそういう問題ではないと思っている。

大きく広い、寂寥感溢れるこの図書室。静まりすぎて怖いくらい。ジュリアナは舞踏に関する書籍を、元の本棚に戻そうとする。しかしジュリアナの背丈より高い位置なので手どころか指先すら届かない。前は背がおそらく高い侍女に取つてもらつたのだが、今日は一人で來たのだ。踏み台があれば、問題は解決するのに。と執事たちに提案してみたのだが、「足を踏み外されて、御怪我でもなされ

ては危険です。ただでさえ、貴婦人の靴は不安定ですのに」と一蹴された。

「……ん~つ。……え、あつ」

ジュリアナの呻きは途中で驚きに変わった。

「兄さま！」

ジュリアナの後ろに兄がいた。一歳年上の次兄のスタンレーだ。ジュリアナが届かなかつた本を元の位置に戻してくれたのだ。

「え、あら、ランスロット兄さまも？」

スタンレーの後ろに長兄・ランスロット（ジュリアナとは三歳離れている）の姿もあり、ジュリアナは驚いた。次兄のスタンレーは背が高く体格がいい。ランスロットは、その背に隠れるよつな格好になつっていたので見えなかつたのだ。

しかしこの二人が共に図書室を訪れるとは珍しい。ランスロットは次期当主ということで、それに恥じぬよう研鑽を積んでいる。スタンレーは軍人になるべく、過去の戦記で戦術を学び、最近は剣や乗馬に勤しんでいる。聞いたところによると、二か月後に行われる軍学校の受験を受けるらしい。

そんな忙しい一人が揃つて図書室を訪れるとはどういう意図であろう。まさかジュリアナを助けに来たわけではあるまい。

「どうしましたの、お二人揃つて。何かお探しですか？」

ジュリアナが尋ねると、ランスロットが一步を踏み出した。エアルドレッド家遺伝の金色の髪が踊る。背こそ弟のスタンレーに劣るが、その威厳に満ちた顔つきと態度は周りの者が安易に近づけない、堂々とした雰囲気がある。スタンレーとはまた違う風格である。これこそ伯爵家当主に相応しいといえよう。

「いや、別にたいしたことではないのだがな。スタンレーと意見が分裂してしまつて」

分裂？ 何か揉めるようなことがあつたのだろうか。

ジュリアナが心配そうな怪訝な表情を兄たちに向けると、ランス

ロットが大仰に胸の前で手を振った。

「違うぞジユリアナ。そんなたいそうなことではない。スタンレーがぐちぐちしつこいから、兄としてこいつの間違いを正してやるうと思つてな。書物で白黒はつきりつけるためにここに来たんだ」「そうなのですか。では私はお邪魔にならないよう、これで失礼致します」

一礼して踵を返そうとしたジユリアナを、ランスロットは素早く引き留めた。

「ジユリアナがいたのならわざわざ調べるまでもない。ジユリアナ、聰明な妹としてスタンレーの無知をなおしてやってくれ」「はあ……。私がお答えできることであれば」

兄さまに指摘できるところなんかこれっぽっちも見当たらないのに。ジユリアナは一人の兄を交互に見やりながら、困惑した。

「それで、どのよつなことでじょうか?」

ジユリアナが不安げに訊くと、一人の兄は声を揃えた。

「月さ!」

「つきい?」

思いもしなかつた単語に、ジユリアナは思いつきり怪訝な声を出してしまった。それから、はたと気づいて片手で自分の口を塞いだ。もう成人近い二人の兄が何故そのようなことで揉めるのかと、ジユリアナは首を傾げた。

「ジユリアナ、月は東か西か、どちらから昇る?」

訊いてからランスロットは勝ち誇ったような笑みを、スタンレーは真摯に硬い表情を浮かべた。

迫られた華奢な妹は、今だ事態がうまく把握できず当惑しながら己の知識を探つた。

「東から昇り、西へ沈む……というのが常識ではないかと……」
敢えて直接的な断言は避けたが、ランスロットは勝利者めいた口調で、後ろに突つ立つていた弟を振り返つた。

「ほらみろ！俺が正しかつたぢやないか」

スタンレーは味方がいなくなつたことにはしてか、自分の意見が違つていたことにたいしてか、ギリリと頑丈そうな歯で歯をしつした。

しかしすぐ悔しそうな態度を捨て、お門違いにジュリアナに反駁した。

「でも太陽は東から西に沈むんだる？ だつたら月は西から東に沈まないとおかしい」

？ 何でそうなるの？

ジュリアナはどう返答してよいものかと詰まつた。ランスロットも弟の主張を聞いていただるうに、理解できん、と苦笑い。しばらく考え込んだジュリアナは、試しにスタンレーに訊いてみた。

「もしかして兄さまは、太陽と月を同一の存在だと思つていらっしゃらない？」

流石に違つわよね。と自分が愚問をしたことに申し訛なさを感じたが、

「えつ、同じじやないのか！？」

……この兄は、実に面白い人であることが分かつた。

「…………ですから、月は東から西へ昇るのです。正しくは私たちがそう見えているだけですけど」

説明だけでは分からぬだらうと、ジュリアナは懇切丁寧に手振りまでつけて結論づけてやつた。

スタンレーはどうやら太陽と月が同じだと勘違いしていたようであつた。昼間は太陽、夜間には月に変化し地上を照らしている、という具合に。

始めこそは腑に落ちない、といふ雰囲気が素で出ていたスタンレーであったが、ジュリアナの説明を聞いてようやく納得したらしい。ふむふむ、と頷いて「説明ご苦労！」と大声で自分が理解できたこ

とを告げた。もしかすれば、羞恥心を隠すためだつたかもしれないが。

「一人の呆れた苦笑いに、しばらくしてだんだんスタンレーは萎れてきた。ランスロットは苦笑いをやめ、兄としてやんわりと、しかし厳しく叱つた。

「お前は軍人になるのだろう。この程度のことを知らなかつたといことは勉強不足ということだ」

しかし、軍人にはそのような知識を得る必要がありません。

兄の喝に完全に俯いてしまつたスタンレーは、いつもの威厳を忘れてきてしまつたかのようだ。しかし、口調ははつきり険を帶びていた。

「何を言つ。もし月や星の知識もなく、方角を示す磁針も無かつた場合、孤軍と化したときどうするつもりなのだ。例え一人になつたとしてもお前は自分の位置が掴めるのか」

諭すランスロットにも険がある。ジュリアナは兄弟喧嘩でも始める気なのか、とハラハラした。

「だいたいお前は甘い。自分が貴族出身だと舐めているのではないか？ 確かに今、貴族は士官の地位をおおかた約束されている。しかしそれも今だけだ。何故なら最近農民の受験者も増えている。無能な貴族を優遇するほど、この国は腐つてはいないはずだ」

それに、と彼は続ける。

「お前もよく分かつてゐるだろ？ 無能な将が軍を率いればどうなるか。たつた一人の一つの判断が、何万人もの尊い命を奪うことだってあるのだ」

命の話を持ち出されて、スタンレーはぐつと言葉を失つた。過去の戦記を調べ、頭に置いているだけに鋭く刺さつたにちがいない。しかしただ萎れているだけの人物ではない。すぐに立ち直り、顔を上げランスロットに宣言した。

「兄上の仰られた通り、俺は油断していました。これから武学だけでなく、他の学問にも尽力します！」

スタンレーはさつと腰を下り、軍人の鑑のよつな一礼をすると図書室を大股に去つて行つた。

「あいつは素直でいいな。軍人だけに限らないが、他の意見を聞き入れられる奴は立派だ」

ランスロットは弟が去つて行った方向を見ながら、表情を緩めた。それを見て、びくびくしていたジュリアナは安堵の息を吐いた。

「もう、兄さまたちつたら。一時はどうなることかと思いましたわ。隅っここの妹の存在を忘れて怒氣丸出しにしないでください」

半べそ状態のジュリアナは、ランスロットを軽く睨んだ。

「ああ、すまない。つい熱が入つてしまつてな。だがあいつには判つてもらわなければならぬことだつたのだ」

妙に寂しそうに話すランスロットに、ジュリアナは思わず口を開いた。

「でもスタンレー兄さまはよく御存知だつたと思いますわ」
あれだけ戦術を勉強している方ですもの。

「……だろうな。あいつはいざれ、部下や幕僚の意見も大事にする良い上官になるだろう。それが良い指揮官となるかどうかは別だが」
すこしの沈黙をあき、遙か頭上の天井を見上げる。

「……我が国の軍は、新鮮な血を欲している」

突然の兄の発言に、ジュリアナは意味を掴み損ねた。

「それは、どういう

意味ですか、と訊く前に聴いジュリアナは理解した。

「戦争に、なるのですか」

知らずに声が震えた。

戦争になれば、この国は、兄は……？

「そうだ。そもそも遠い未来のことではない。だから貴族であるうと農民であるうと、とにかく若い兵を必要としているのだ」

否定してくれ、とジュリアナの願いもむなしく、ランスロットはきっぱり言い切つた。

ランスロット曰く、戦争になつたときの為にいち早く優秀な兵を生み出さねばならない。そのために軍学校は官費になつたといふ。毎日食うことすら危ぶまれる農民は、ただで衣食住が保障される軍学校に入学を決意するらしい。

しかし畠を耕していただけの農民は、国や王への忠誠が薄い。中にはまったくない者もいる。

その農民たちの訓練や士氣をあげるために、多くの時間を必要とする。

だから兵への教育は一日でも早い方がよいのだ、とランスロットは言つ。

『国を護るのは、この國に住んでいる者だ』
ランスロットは厳かに呟くと、図書室を出て行つた。

図書室に一人残されたジュリアナ。

想像もしていなかつた事実に打ちのめされた。

図書室に返しに来た二冊の本。

一冊は舞蹈の本。そしてもう一冊は勉強の合間に休憩するための、恋愛小説だった。

自分がいかに世の中の出来事に無関心なのが、証明されたようだつた。

次兄が用のことを詳しく知らなかつたことに對して、ジュリアナは心のどこかで小馬鹿にしたわけではないが「そんなことも知らなかつたの?」と思つていた。

が、違つた。二人は目指しているところはそれぞれ違うが、自分たちなりに国について思案していく、そしてそれに自分がどう関わつていくのかを明確にしようとしている。

ランスロットはスタンレーを無知だと叱つた。そしてスタンレーは屈辱だろうが、無知を認め、今以上に勉学に励むと言つた。

じゃあ、私は?

私は何をしていた?

兄さまたちは多忙に追われても思案を続けていた。でも私は自分のことだけ考えて、何も考えていなかつた。

あまつさえ、空いた時間に娯楽なんて。

考えることをしない人間が娯楽を嗜むと、『樂』だけを追求するようになるんです。

かつて、あまりに勉強をしそぎなカーティスに訊いたことがあつた。「たまには頭を休めて、楽しい物語でも読めばいいんじゃない？」

その時カーティスはそう答えたのだった。

今考えれば自分の発言がどれだけ幼稚だつたのか。
カーティスは別にジュリアナのことを指したのではないだろうが、「考えない」人間はまさに自分のことだ。

時間は人を待つてはくれないのだ。

その貴重な時間の間にどれだけ成長するのか。

きっとそれは、その人間がどれだけ思考したかを表す。

ジュリアナは、兄が戻してくれた一冊を四苦八苦しながら抜き取つた。そして「娯楽」を一番奥の本棚になおした。

「白銀は私たちの誇り。それ以外の色はどれほど華美であろうと、美しいはないのだ……」

きつと、きつとまた逢える。
もう何色でもいいから……。

2・1（後書き）

「これでエアルドレッド4兄弟、全員が書けましたー。
皆可愛いです。

大人になつても子供でいてほしい。

ちなみに上から、

長男・ランスロット（19）次期伯爵家当主。
二男・スタンレー（17）軍人志望。
長女・ジュリアナ（16）もうすぐ社交界デビュー。
三男・カーテイス（13）ガリ勉少年。

……カーテイスだけなんか酷いですね。
でもそれもまた愛情（？）。

あの日の快晴が嘘のように、最近はずっと空の機嫌が悪い。フェリシアの機嫌も大変悪い。何故だかは自分でもよく分からないが、とにかくいらするのだ。思い当たる原因はきっと。

『嫌いなのだ』

冷たく言い放った一言。

カーティスという少年は、ナイフで抉られたような悲惨な表情を浮かべた。その後カーティスは去つて行つたが、あの寂しそうな背中が忘れられない。

本当の所を言うと、「始め」は傷つけるつもりはまったくなかつた。ただあのとき。あのときに限つて左眼が猛烈に疼いた。まるで歩み寄つたフェリシアを止めるかのように。

左眼の眼痛で意識が遠のく瞬間、フェリシアの脳裏にあるものが走馬灯のように駆け巡つたのだ。

白銀が白銀以外の色に染まる。いや、染められていく。

それをただ眺めているしかない、無力な自分。大切で、この世で最も大切で離れたくない、愛していたものがあっけなく崩れる怖さ。

抵抗する力はお互い残つていない。残つていたとしても無効化される。何故なら、相手は我らよりも強いから。ねじ伏せられる力があるから。

我らを消すのはそいつだが、事の発端は別のところにある。

人間だ。

そいつは悔しいほど上手くしくみを作つていて、そいつを恨もうにも恨めない。だから我らは我らよりも弱い人間にしか怒りを向けることが出来なかつた。

我らは別に人間を殺したいほど憎んでいたわけではなかつた。しかし人間はあるうことか我らを敵視し、武器を持つて森に入つてこうとする。

我らはそれを阻止したかつた。平穏な生活を守りたかつただけなのだ。

我らは一一つで一つ。しかしその片割れば、捷を破つた罪に問われ、^{誇り}白銀を奪われてしまつた。

恨むべくは人間。

ずっと胸に人間への憎悪の炎を鋭く燃やしながら生きてきた。

意識を取り戻したとき、傍にいたのは人間だつた。

私たちを引き裂いた原因の、諸悪の根源の人間！

心の底から憎いと思い続けてきた人間。眠つていた本能のようなもののが私に制御を施した。「これ以上、関わるな」と。

ほんの気まぐれで、少年の探し物を見つけてやつてから始まつたささやかな関わり。初めこそはつづけんどんだつたが、どんどんと心が隔てていた壁を溶かしていくようで。でもそうではなかつたのだ。

彼もまた私を孤独に突き落とした人間。我が種族と交わりを持つてはならないもの。

ずっと共に生きよう、と誓つた私たちの愛を踏みにじつたもの。

だから蹴つた。『嫌いなのだ』と。私とお前は一生かかわることは出来ないという本能のささやきから。これでよかつたのだ。これで。

しかし心の片隅に何かが引っかかる。本当にこれでよかつたのかと。

あの少年は、私を孤独から救い出してくれる存在になつたはず。あいつの代わりにはならないだろうが、一緒に語り合える存在になつたかもしれない。

そう考えてしまふ。自分はどれだけぬくもりに飢えているのだろうと思つ。人間が嫌いなくせに、人間が去つてしまえば寂しいと感じる。去らないでくれ、私の傍にいてほしい、とまで思つ。

馬鹿馬鹿しい矛盾だ。

馬鹿馬鹿しいが、自問自答を繰り返してしまつ愚かな自分は消せない。

『矛』をとるのか『盾』をとるのか、と。どちらを選べば良いのだろうと。

今までの感情からならば、迷わず人間は敵だと答える。勿論今でもそう思つてゐる。

しかしその一点しかない凧いだ海に、大岩が飛び込んできたせいでもどうすればいいのか分からぬ。元の凧いだ海に戻す方法が皆目分からぬのだ。

人間が敵か、否か。

それは天秤に均等に釣り合つてゐる。だからどちらかに小石の欠片でも乗つて少しでも傾げば、決まつてしまいそくなくらい、どちらも想ひも捨てるることはできない。

私はあの少年がどうしてくれれば、満足するのだろう。天秤に小石が乗るのだろう。

こういうときに、あいつがいてくれれば。

と考えるが、それはおかしいと自分で自分の頭を殴りたくなる。だつてあいつがいたら、あいつ一筋なわけで。今はあいつがいいながら、人間を受け入れるべきか、否か迷い悩んでいるのだ。

「……どうすればよいのだ……。どうすれば……」

声に出してみたが、何がどう矛盾なのかが分からない矛盾は解けるはずもなかつた。

* * *

雪はまだ降り続いていた。窓からだけで分かる寒さは、部屋の中にも入り込んでくる。

火を焚き、上着を重ねるが、自然の厳寒には完全には打ち勝てそうもない。

最近は屋敷中が何となくピリピリしている。

原因是次兄・スタンレーの軍学校受験だ。

この寒さと雪で、いまいち乗馬や剣の練習が上手くいかないのでスタンレーは苛立ち気味。それが屋敷の執事や侍女に伝染してしまつてゐるのだろう、とカーティスは推測する。

スタンレー兄さまは確かに頭がよく切れるけど、ちょっと短気なところが玉に瑕なんだよね。

というのは長年共に（といつてもあまり顔を合わせることはないが）この屋敷で過ごしてきた弟としての評である。

読んでいた政治・経済の本から顔を上げると、小窓のサッシに雪が積もつてゐるのが見えた。そのたびに、纖細の心のカーティスの顔が曇る。「白銀」はあの不思議な少女を思いださせるからである。ついでにその少女にはつきりと「嫌いだ」と言われたことも思い出す。

「僕、フヨリシアに何かしたつけなあ……」

過去の自分の素行を手繕り寄せてみると、それらしき害のある行動はない。……と思う。

「嫌いだ」と言われた日は憤つたが、冷静になつた今は何故かあの

シニカルな少女に逢いたくてたまらない。

あんな態度を受けておいても嫌いになれないなんて。我ながら実際に不思議である。

あの森にもう一度行つてもいいのだろうか。もう一度フェリシアと話してもいいのだろうか。

悶々と考えを広げてみるが、はつきりとした答えは見つからず曖昧だ。

自分の気持ちに正直になれば、逢いたい。けれども、別れが最悪だつただけにどうしたものか。

こればっかりは、どの教科書にも書いていない。

「カーテイスさま。お密さまがお見えになりましたが、いかがいたしましたよう」

カーテイスの自室のドアを叩く音が、彼を現実に引き戻した。客？ そんなの聞いてないけど。と少々うんざりしたが、

もしかして、フェリシアか！？

確証はないが、そんな思いつきがカーテイスの胸を駆け巡る。カーテイスは小躍りしそうになつたが、必死でそれを食い止めながら、ドアを開けた。それからドアの叩いた侍女と共に客の待つ玄関へ向かつた。

待つっていた客人は、残念ながらカーテイスの思惑とは違つた。

「カーテイス！」

思い切り飛びついてきたのは、

「ティファニーじゃないか」

従兄妹の巻き髪少女である。後ろには当たり前の女性教育係・ブライスが控えている。

「どうしたんだい？」

カー・ティイスが訊くと、巻き髪少女より早くブライスが反応した。

「すれどもいな黒縁メガネを、くいつと押し上げながら、

「申し訳ありません。ティファニーお嬢さまがどうしてもこちらに遊びに来たい、ときませんので。スタンレー様のお邪魔になるから、とお咎めしたのですが」

例え怒っていても申し訳なさを感じていても、表情と声は淡々としているのがブライスの特徴だ。内心、ひやひやしていることだろう。

そんな教育係の苦労を知つてか知らずか、色んな意味で幸せな巻き髪少女がニコニコと太陽のような笑みを放つている。

カーティスの誤解（正しくはティファニーの誤解していただけだが）が解けたあの日から、ティファニーは更に人懐っこくなつた。ティファニーは可愛いのでそれでいいのだが、場所問わずに抱き着くのはいかがなものかと思う。

とはいへ煩わしいわけではないので、小さな巻き髪少女を抱き上げてやる。

ティファニーは微笑んで、カーティスの首に小さな腕をまわす。柔らかく華奢な身体からは、花のような芳香が漂う。絹のような栗色の髪が顔に触れる。くすぐつたいたが心地よい。

「ねえカーティス。ティファニーご本が読みたいの。このお屋敷の図書室は、ティファニーのお屋敷の図書室よつうんと大きいんですよ？」
ティファニー、見てみたい！」

カーティスの腕で、キヤツキヤとはしゃぎ出すティファニーにブライスは「連れて帰るのは無理」と判断したらしく、きつちり一礼してカーティスにティファニーを委ねた。

「申し訳ありませんが、カーティス様。お嬢さまをよろしくお願ひ致します」

分かりました。とカーティスは了解して巻き髪少女を下ろした。

ニコッと微笑んだ巻き髪少女とカーティスは手を繋ぐ。そのまま二人は図書室へ向かつた。

そのときかすかに開いていた玄関から、白銀の雪が入り込んだ。

プライスの閉めが甘かったのだろう。

気づいたプライスが慌てて閉めたが、閉めたときの風の影響で、雪は玄関の隅に移動した。

しばらく冷気を辺りに放っていたが、やがて力尽きて溶けた。

2・2（後書き）

指先冷たい……。

一日中暇を持て余していた露草です。

「葛藤」というトーマのもとフローリシアはさんざん悩んでいます。
何でわざわざとはつきしないの？ どうなんぞりな方もいらっしゃるかも
やるかもしれませんが、これがフローリシアであります。

今はまだお互の気持ちが上手く通じ合っていませんが、いずれ…

…！

ティファニーとプライスが書いて、非常に満足している露草でした。

寒さと冷たさが凝縮された風が辺りを吹き抜けていく。
枝にかかるうじて引つかかっていた雪は、枝が揺れるので地面に落下する。しかしその枝の色は見えない。何故なら雨は大量に振り続けていて、すぐに場所を白銀で覆い尽くしてしまったからだ。

……太陽はいつ出てくるんだろ。

元々寒い地方で、その上真冬なので始終雪が降りやむことはない。
雲に隠され姿を現さない太陽を憂いて、エアルドレッド伯爵の三男・
カー・ティスは浅くため息をついた。

ちなみにため息をついたのは、太陽と蒼穹が恋しいからだけではない。

フヨリシアだ。

外のあちこちに降り積もる白銀の雪が視界に入るたび、癖のない
白銀の髪の少女を否応なく想いだしてしまつ。

『嫌いなのだ』

そう突き放されても、離れたくない。ずっとあの少女のもとにいたい、と氣づけば勝手に願つてしまつている自分は、おかしいのだらうか。

はふ、とまたため息。

今日は今朝からこんな状態で、朝食時には母に「カー・ティス、具合でも悪いの?」と心配させてしまう始末。カー・ティスは「いえ、違います」と慌てて否定した。本当に体調が優れないのならともかく、一人の少女についてあれこれ悩んでいるのかと知られれば、別にどうつてことはないかもしれないが、カー・ティスは嫌だ。兄に苛

立ち発散としてからかわれるのは目に見えているし、何よりフンリシアの存在をこれ以上広めたくないのだ。

そんなこんなでどうしても勉強をやる気がおきないので、今日は休養をとらせてもらひよつゝ、教師たちに便宜をはかった。

「じりん、と自室の寝台に寝転がる。眼をぱちぱちしたり、綺麗に整えてある髪をぐしゃぐしゃにかき回してみたり、意味もなく指で指を触つてみたり。誰も見ていないから良いものの、完全に挙動不審だ。

しばらく意味不明な行動を続けていたが、カーティスは突然雷に打たれたように跳ね起きた。

そしてそのまま、屋敷の裏側に駆けて行つた。

* * *

枯れ草のにおいが辺りの空氣に紛れ込んでいる。

小屋の中から、シャツシャと何かを梳くような音が響いてくる。

ここは馬車の馬が生活し、御者たちが馬の手入れをしている馬小屋だ。

カーティスは引き戸を引いて、中に入った。

瞬間草の香りが強く強く鼻をくすぐる。滅多に嗅ぐ匂いではないが、この匂いはとても落ち着く。

御者のグレアムはいるかと、頭を動かして捜す。すぐにお田当ての人物は見つかるが、グレアムは馬の毛並を一心不乱に梳かしてて闖入者には気が付かない様子だ。

しかし勘の良いグレアムは、すぐに気づき、ブラシを持った手を止めた。

「おや、これはこれはカーティスさま。どこかお出かけなさるのですね、お待ちください。すぐに馬を出しますんで」

カーテイスは遠出の用があるときしかここを訪れないのに、グレアムは今回もそうだと思ったのだろう。

「いや、今日は違うんだ。用は用なんだけど……。その……、そつ

相談！ グレアムに！」

しどろもどろになりそつたので、一気に言い切つた。

グレアムは手入れをしていた馬の毛並を優しく撫でる。

「はい、私で良ければ」

口元を綻ばせながら、グレアムは了承してくれた。

歳をとることに顔に皺が少しずつ刻まれていくグレアム。しかしそれは老人というよりも「おじいちゃん」というような優しさを強調している。

「あのさ、グレアムって結婚してるよね？」

カーテイスの突然の質問に、グレアムは一瞬きょとんとしたが、

「はい。妻も子供もあります」

と、また元の微笑む表情に戻つた。

グレアムの両親はもう他界しているが、どちらも使用人だった。その子供であるグレアムもとある名貴族の家に仕えていた。

その家にはグレアムと同世代の令嬢がいた。流れるようなプロンドに、愛らしくりつとしたエメラルドグリーンの瞳。

グレアムはその令嬢を一目見たとき、心臓を射抜かれたような感覚を覚えた（らしい）。

有り体に言えば、一目惚れだ。

仕えていた間の関係は、貴族令嬢と使用人なので滅多に口をきく機会はなかつた。しかし令嬢は、御者としてせつせと忙しく尽くすグレアムに好意を持つたらしい。接近する機会があれば積極的に話しかけてくれた。

彼女の天使の笑みは、見るたびグレアムに独占欲を強めさせた。嗚呼、この人の傍にいたい。と感じるようになったのは出逢つてから五年ほどたつてから。グレアム・令嬢ともに十八歳前後のことだ。

唇を重ね合つ仲まで発展していたが、彼女の父親に見つかってしまった。当然の如く彼女には婚約者もいたため、父親は天と地がひっくりかえるほどの勢いで激怒した。その晩、追放命令を下された（要するにクビ）グレアムは泣き崩れている彼女にそつとこいつを持ちかけたらしい。

「駆け落ちしよう」と。

彼女は突然のことには膛目したが、すぐグレアムの堅い手を握り返した。

そしてそのまま一人の姿は何処かに消えたという。

というのがグレアムの逸話である。実は彼の夫人は有名貴族の令嬢なのだ。

そこいらの下手な恋愛小説より甘々でロマンチックな恋を見事愛に変えたグレアム。何故カーテイスが「馬の手入れ命」のグレアムに相談をしようとしているのかというと、男女の色事について師事してもらいたかったからである。

「グレアム。グレアムは奥さんのこと、好き？」

自分では気づいていなかつたが、顔が林檎になつたカーテイスを見て、全てを悟つたグレアムは目を細めながら微笑んだ。

「はい。それはとても」即答してやると、目の前の恋愛経験ゼロの少年は何故か更に狼狽えた。

「じ、じゃあ、もし奥さんに『嫌いだ』って言われたら……？」

言葉に詰まりながら、自分の疑問、いや気持ちを伝えようとする少年がとてもいじらしい。からかつてやるうと思つたが、眞面目に問い合わせを重ねる思春期少年にいい加減なことは言えないと思い直し、素直に答える。

「抱きしめます」

想定外の答えだったのだろう。カーテイスは絶句して沈黙してしまつた。しかし顔は相変わらずものすごく林檎色だ。思い当たるこ

とでもあるのだろうか。

「抱きしめて、自分に非があつたか、それはどのよつなことどどの
よつに貴女を傷つけたのか、と優しく訊きます。そして非があれば
素直に詫びて、もう一度私を『好き』になつてくれないか、と頼み
ます」

過去の楽したや苦しさから導き出した経験を、ゆっくり想い出し
ながら紡いでいく。

「妻が『嫌い』でも私は『好き』です。生涯妻以外を愛しませんし、
愛する気もありません」

そこで今まで下を見つめていたカーティスは、ぱっと顔を上げた。
何か大事なものを得て、大切なことに気付かされたと。青色の瞳は
鏡のよう澄み渡つていた。

「カーティスさま。逃げた魚といつのは大変大きいものです。故に
逃げられたときの喪失感は例えようがありません」

運命の女性も逃げてしましますよ。

遠回しにそう告げたグレアムは、くじつと顎を上げる。

「さあ、行きましょうカーティスさまー 行先はいつもの森でよろ
しいですね！」

* * *

自分以外に生物がないと思われるこの森は、静寂七割・雪三割
で創られているのではないか。と、この森唯一の生物、フェリシア
は思つ。

白銀で統一された森に、同じくほとんど白銀で統一されたフェリ
シア。吹雪が強くなくても、完全に同化してしまつている。よく目
を凝らさないと彼女の姿を視界に捉えることは不可能だ。

綿よりももつともつと上質な白銀の髪が、彼女の華奢な身体を覆い尽くす。敏感な髪は、少しの風でも反応し舞い踊る。氷の彫刻の如き完璧な美貌。

身にまとっているものは、薄く袖が無く、膝丈までしかないワンピース。露出した腕や脚や顔には色がないと思われるほど色素が薄い。形の良い小さな唇と、常に爛々と輝きを放つている濃蒼色の瞳が、彼女の唯一の『色』だ。

身体のどこに触れても、氷のように冷たい。凍つてしまわないのかと疑うくらいに。

そして彼女は独りだ。

かつてここにいた他の生物や仲間は、もうどうの昔に姿を消してしまった。

孤独を融かすためにできることは何もなく、ただ時間だけが過ぎていく。

昨夜から続く吹雪のせいで、すっかり乾いてしまった唇を小さな舌でぺろりと舐める。しかし冷気がそのかすかな潤いを奪つてしまつ。

彼女は震えている。それは寒さのためではない。何故なら、彼女の種族の身体は寒さには頑丈に創られているからだ。ではどうして震えているのか。

その理由は……。

馬の蹴りだす蹄の音が、沈黙していた空気を震わせフェリシアの耳朶まで届く。

気に留めるまでのことではない。馬車はよくこの森を通る。しかし、通り過ぎて行つてしまるのが常だ。

期待という単語は捨て、顔を自分の膝に埋めるという体勢に徹していると、

フェリシア。

自分を呼ぶ声が聞こえた。でもいつもの幻想が作り出した幻聴ではないのか。

自分の耳を疑いながら、顔を上げ、耳を澄ますと、ザクザクと雪を踏みつける足音が聞こえてくる。

フエリシア。

どこか懐かしい声。

これは一体。

幻聴か。

『本物』か

……？

2・3（後書き）

うふ？なカーティスが書いて楽しかったです。
グレアムが理解ある人で良かつたね、カーティス。

勉強のあいまいに執筆するので、なかなか更新という形にならず非常に残念です……。

風が北から強く吹きつけてくる。風は吹雪と一緒にになり強度を増す。

白い肌に突風は針となつて突き刺さり、痛みを感じさせる。金髪は今にも雪に純白に染め変えられてしまいそうだ。

ただでさえ視界が悪いのに、濃霧が更に見通しを効かなくさせる。小さな小さな水の粒が、空気中を浮遊している、楽しそうに。

冷氣がまたやつてきた。それは体温を奪い、辺りの温度をぐつと下げる。吐く息は白く、凍るようだ。息を吐きだし、吸い込む瞬間に水の粒が喉から入り込む。すると喉からすうつと冷えていき、身体全体に行き渡つてしまつ。それは避けたいが、まさか呼吸しないわけにはいかない。凍死する前に窒息死してしまつ。

必死に水の粒や冷氣と格闘しながら前進する。分厚い靴で足を包んでいるのだが、雪はそんなものお構いなし。熊の歯のように簡単に通り抜けてしまう。

そこまでつらい目にあつのに、なぜ彼は森を歩き進んでいるのか。

答えは単純。

逢いたいから、だ。

誰に？

この森の主ともいえる、不思議な少女に。

人間とは実に面白い生き物だ。だつて「逢いたい」という理由だけで極寒の森に出向いてくるのだから。

「逢いたい」から、寒いという当たり前の感覚を鈍らせながらひたすら前へ。そしてあてもなく少女の名前を呼ぶ。

フヒリシア。

と。

返事は聞こえない。だが彼は簡単に引くつもりはない。
彼は少女の返事が聞こえるまで、この森を彷徨つてでも帰らない
と決めていた。

是が非でも、少女・フヒリシアの声が聴きたかった。

* * *

ひゅー、ひゅるり。

冬の冷たさ満載の北風は、今日はいつもより比較的穏やかだった。
木々と雪以外何もなく、殺風景なこの森で生活している少女は優
れた五感でそう感じ取った。風が落ち着く日は普段からたびたびあ
るのだが、少女は今日は何かが違う、何かが起きる、とも五感が感
じた。

そのとれ雪を踏みしめ歩く音と、小さな声が少女の耳に届いた。

フヒリシア。

幻聽だと思った。

今まで孤独だったのが、そう簡単に解放されるはずがないと。

フヒリシア。

懐かしい声。

なぜだ。なぜこんなにも、心が揺れる？

なぜこんなにも、この声に逢いたかったと思つのだ。私はこの声の主に、

逢いたかった。

意識した途端、無意識に涙が溢れ零れる。

ぬくもりに飢え手探りで探していた少女の涙は、止まらない。嗚咽を押し殺すため懸命に堪えていたが、やがて壇はもたなくなつて崩壊した。

足音はだんだんこちらへ近づいてくる。その証拠に音が大きくなつていく。

嗚呼、なんと自分は間が悪いのだろう。足音が大きくなつてくるのに、嗚咽が大きくなつていくなんて。

手で目元を覆うが、小さな手だけでは拭いきれない。細く白い指の隙間から、透明な雫が流れ落ちる。透明な雫が指を、手首を伝い、自分の髪色と同じ白銀の雪の地に着地する。

2、3適の「ぐ僅かな涙。しかしそれはどんな凶器よりも恐ろしい。何故ならこれは、一瞬で全てのものを巻き込んで凍らせてしまうのだから。

ピシッ、ピシッ。雪が氷に変化する音。

只でさえ冷たく、普通の者なら縮み上がる雪の上。彼女の涙は雪を個体にさせ、更に冷たく堅くさせる。己の姿が映つているこの地面は、鏡のよう。白銀の髪は確認しずらじが、肉食獣の瞳 不気味なほど怪しく妖艶に輝く、濃蒼色 はしつかりと映りこんでいる。

これが、私が。

自分の姿なのに、愛しいようなめちゃくちゃに壊したいような。何ともいえない複雑な感情が湧き上がってきた。少女は涙で氷にな

つた森の地を、優しくゆっくり触れる。そのまま細い指を滑らせていく。すると少し凹凸ができた所に指の爪がくいっと引っかかった。

刹那。

「シユウウ……、と氷が白い冷氣を出して溶けた。辺りは白銀の雪が降り積もった森に戻る。凍りつくのもまばたきを一回もできないという速さだったが、溶けるのもそうであった。

「……儂い命だな。……私たちはそういうでは、ないのだが……」

「そう、我らに命の箱は存在しない。即ち、寿命という概念がないのだ。

微かな時間に、微かな想い出に浸つていると、

「……フェリ、シア。よかつた、ここに、いたんだね……」

座り込んだ少女の頭上から、やけに疲労で上手く呪律がまわりきつていかない男の声がした。

* * *

長く住み慣れた森を離れて、人間が住む村に足を歩ませていったのは、どのくらい昔のことであつただろうか。

記憶はおぼろげだが人間を敵認定してから、それほどたつてなかつたように思う。我が種族は寿命がない。だから歳月という感覚が大変鈍く、それがどれほど前のことだったのか脳がいちいち把握しきれないのだ。

その日のその村は、何やら騒がしかった。人間たちの思考は理解できないが、何かを讃え祀るために「祭り」というものを催していく

たらしい。昼はどんちゃん騒ぎで、五月蠅く迷惑なことこの上なかつたが、夜は対照的に静寂が染み渡っていた。

疲れるのだつたら、昼間も大人しくしていれば良いものを。

心の底から、人間の言動に首を傾げる。何故、人間たちは意味もなく、ただ疲労するだけの「祭り」などを行うのだろう。

まあ、それはどうでもいい。人間を理解しようとは思わない。思えないからな。

冷たい漆黒の闇を足早に駆け抜ける。何故、敵である人間の居宅に訪れたのか。それについては特に意味はない。我らは人間のように意味や利害を考えて行動することはない。ああ、でも「祭り」についてでは別だが。

……話が脱線してしまつた。意味はないが、敢えて言つなら好奇心。もしあいつにばれたら口汚く罵られるだろうが。

片割れの顔を思い出しながら苦笑する。

足を進めながら、ふとあるものに目が止まつた。

人間が住む家の窓から漏れている光だ。よく見ればあちらにもこちらにも。

何だ？ あいつらは日が沈めば就寝するのではないのか？ あの光を昼の明るさの代わりにしているのか？

人間に對して奇怪な印象を強めながら、更に足を前へ進めた。が、その足をすぐ止める。

どこの住居からか、美しい旋律が聴こえてきたからだ。滑らかで心洗われるような、澄み渡る旋律が。それは夜の静寂を裂くようなことはなく、むしろ逆に乗つて、よく響いてきた。

しばらく耳を傾けていた。生まれて初めてだつた。「旋律」というものに触れたのは。

旋律に満足して、四本足の獣は駆け足で跳ねるように、闇より深い漆黒の森へ姿を紛れ込ませていつた。

* * *

月よ、星よ、歩んできた道を照らして。
輪郭や色がはつきりと浮かび上がるよ。ついに。
私のもとへ、愛しいあの人を導いて。

雪よ、花よ、美しい色は何ですか。

純白でも真紅でも濃蒼でもない。

私を、美しいあの人色に染めかえて。

純潔よ、愛よ、優しく包み込んで下さい。

光を全て吸い込まれてしまつてもいい。

私は、私の全てを貴方に捧げましょ。う。

印象強く頭に残った旋律を思い出しながら喉と唇を動かす。
初めてこの旋律を聴いたとき　なぜだがとても心が和み、落ち
着いた。あのときはこれを奏でているのは楽器か何かだろうと思つ
た。しかし後で知つた衝撃の事実。

この旋律を奏でているのは楽器などではなく、まさかの人間その
ものだつたということだ。その衝撃に恐ろしいほどの勢いで驚愕し
たが、人間にもあるような温かい声が出せるのかと、『敵』だと決
めつけていた人間を少し修正した。

なんのためにこれを奏でるのかはいまいち分からない。しかし分
からないながらもフェリシアはある一人の人物のために奏でていた。
フェリシアの細い膝に頭を乗せて、眼を閉じている金髪の少年。
無愛想で皮肉的なフェリシアを敬遠することがない、……カーテ
イスという名の少年だ。

衣服ごしでも伝わってくる体温の低さの原因は、恐らくこの森を

彷徨っていたのである。フェリシアを見つけるために。

フェリシア、よかつた。ここにいたんだね。

そう言つた瞬間、彼の身体は崩れ落ちた。どうやら低体温のため

意識を保てなくなつたようであった。

人間とはなんと脆いものなのだな。

眼を閉じた、青白い顔の肌を指で優しくなぞる。久しく触れた、自分ではない肌の感触はすべすべして気持ちよかつた。

嗚呼、こいつが人間ではなかつたら。

それだけが悔やまれる。同種族であれば、障壁などないのに。もしこいつが人間ではなかつたら、どうしていたのだろうな。立てても仕方がない前提で考えていると、自然に喉と唇が動いていた。

神よ。教えてくれ。

私はこの者といつまで、どこまで結ばれてもいいのだろうか、と。

意識が朦朧とする中、「つづく」と聞いてきたのは。

澄んだ少女の歌声だった。

それはこの国の古くから伝わる愛をテーマにした歌で、祖母から母、またその娘という風に身分問わず歌い継がれていく。「幼いときは意味が全く分からなかつた」と、どの婦女子も口を揃えて言つらしむ。

月よ、星よ、歩んできた道を照らし。

輪郭や色がはつきりと浮かび上がるよ。

私のもとへ、愛しいあの人を導いて。

雪よ、花よ、美しい色は何ですか。

純白でも真紅でも濃蒼でもない。

私を、美しいあの人色に染めかえて。

純潔よ、愛よ、優しく包み込んで下さー。

光を全て吸い込まれてしまつてもいい。

私は、私の全てを貴方に捧げましょ。

透き通るような歌声が白銀の雪に映えていた。

耳が覚めていくと、徐々に身体全体が目覚め始めた。

意識が戻り始めて目を少し見開いたとき、一番最初に眼に入ったのは、こちらを哀しそうに見つめている濃蒼色の瞳だった。

次に手足、頭というような順序で自分の元の感触が治つていく。あれ、頭が何か柔らかいものに乗っている……？

冷え切った指で、それが何なのか確かめるように探る。そのとき「うひやあっ」と甲高い悲鳴が聞こえた。その後「……起きてるのか？」顔を覗き込まれるように、別の顔の陰が近づいてきたので慌てて開けかけた目を閉じる。

細長い指が顔に触れる。

内心びくついたものの、身体の反応は出さずに堪えた。

そこでようやく確信した。

フェリシアだ。

堂々としながらも時々透き通るこの声も、印象深い濃蒼色の瞳も、この触れ方も、この森に住む不思議な少女に重なった。

確信して起きて礼を言つべきだと思ったが、この前突き返された借りがある。『嫌いなのだ』と冷たく突き放されたときの。我ながらしつこいとは思うが、かなり傷ついたのだ。

フェリシアの膝に乗っている。即ちこれは男のほとんどが羨望の「膝枕」だ。

フェリシアは警戒し終わつたのか、はふ、とため息をひとつだけ吐いて背筋をしゃんと伸ばした。動いた弾みで長い白銀の髪が顔にかかる。カーテイスはその質感の良さに驚いた。貴族なら当たり前の絹よりも、滑らかで肌触りが良い。寝ている（ふり）を継続しているながらも、カーテイスは思わず手を伸ばした。指先がフェリシアの髪に触れる。フェリシアが、カーテイスの突然の行動に驚いて身を引いた。が咎めることなく、大人しくカーテイスの成すがままになっていた。

そこでやめておけばよいものを、カーテイスはあまりの上質な髪が気に入り、調子に乗つて長い髪を指に巻きつけたり放したりと遊び始めた。はじめこそは緘默していたフェリシアだったが、だんだ

ん我慢できなくなってきたのか、華奢な身体をわなつかせた。そしてまだ弄んでいる少年の指を、憎たらしく爪を立て思い切りつねった。

「つぎやあ！」

カーテイスは痛さのあまり、勢いよく上体を起こした。そのとき、

「ゴチン、と派手な音が辺りに響いた。

「いつたあ……、何するんだよ！ フヨ、リシ……」

カーテイスはファリシアを睨もうとしたが、逆に吊り上った濃蒼色の瞳に睨まれてしまった。

ただ「ことではない雰囲気に焦りを覚える。

彼女は右手で顎を押さえてきた。

細い指の間から垣間見える。いつもなら白いはずの顔の顎が、赤くなっていた。どうやらカーテイスが起き上がったとき、彼の頭がフェリシアの顎を打ちつけてしまつたようであつた。

フェリシアが短刀より鋭い瞳でカーテイスの顔を捉える。それだけカーテイスは蛇に睨まれた蛙のように動けなくなつてしまつた。

「……えつと、その……」「めんね」

「ごめんですむなら世の中はどこもかしこも安泰だな」

瞳と同じく鋭く明瞭な声を聞き、カーテイスはとりあえず閉口した。余計なことを言わないためにだ。かつて兄に「女を怒らせたときはひたすら沈黙しているのが一番だ。何とか弁解しようとするな、火に油だ。己ではなく時間に任せろ」と言われたのを思い出したからだ。

「黙っているつもりか。いい度胸だな。私に膝枕までさせておいた分際で」

兄の言いつけを守るうとしたが、この少女の場合黙つていた方が火に油のようなので、カーテイスは開口した。

「膝枕してくれてありがとう。とても気持ちよかつた……、ごふつ」

カーテイスは眩暈がした。フェリシアがカーテイスの頭を思い切

りはたいたからである。

「未婚女性に対して『気持ちよかつた』か。それは充分変態発言と取れるな。変態は撲滅すべきなのだ」

華奢な手のくせに力は想像以上だつた。

「だから、本当に『めんなさいって。どうすれば許してくれるのさ……』

あれから頬をふくらませたままのフェリシアに、カーテイスは必死で許しを乞うていた。

いろいろと機嫌をとるように言ってみたが、彼女には通じなかつた。こりや、なかなか手ごわいな。苦笑しながら、グレアムがここに来る直前に言つていたことを思い出す。

抱きしめます。

彼女が『嫌い』なら、もう一度私を『好き』になつてくれないか、と頼みます。

今こそ実行するときが来た、とカーテイスは実践に移した。

今だむつりと怒つているフェリシアの華奢な上体に腕を回す。そして紙一枚挟めないような密着した体勢になつた。

「何をする！」

フェリシアは爪を立てて抵抗した。しかしカーテイスも男である。必死で彼女の抵抗に抵抗した。フェリシアはしばらくカーテイスの腕の中で暴れていたが、離れないと理解すると大人しくなつた。カーテイスは勝者のつもりでちらりとフェリシアの顔を一瞥する。すると彼女はこころなしか、顔がほんのり赤くなつていた。

……可愛い。

カーテイスはグレアムの過去を真似ることにした。

「ねえ、フェリシア。僕のこと、嫌い？」

しばらく沈黙が続いたが、

「……ああ嫌いだとも。変態野郎だからな」

そっぽを向いて口を尖らせた少女は小さな声で呟くよつと言つた。
それつて本当の本当に君の本心なの。わざと頬を染めていたくせに。

「変態行為をしたことは認めるよ。だから謝る。本当にじめんなさい」

でも、と彼は続ける。

「『嫌い』じゃなくて『好き』になつてくれないかな。僕は今、心の底からやう望んでる」

紳士らしく真摯に伝えたはずだつたが、フーリシアの反応がない
ので駄目だったのか、と慌てる。そして抱きしめた少女を伺つて、
更に驚いた。

彼女は泣いていた。前見たときと同じ、右眼からだけ涙を滴らせ
ている。

「えつ、どうしたの？……やつぱり『好き』じゃ、なれない……？」

もし本当だつたら当分立ち直れないかもなあ、と落胆しながら訊く。
しばらく応答がなかつたが、小さく白銀の髪が左右にゆらゆら
と揺れた。

肯定ではないかもしれないが、否定の返事ではない。

「……私に変態行為をはたらいた罰として、しばらく私を抱きしめ
ていろ」

素直ではない返事なのに、これほど嬉しい答えはなかつた。

「うん」

出来る事なら、ずっとこのままでいたいと思つ自分がやつぱり変
態なのだろうか……？

「……ありがとう」

相手が感謝の言葉を口にしたことは、お互い分からなかつた。

2・5（後書き）

二人の関係は進展したのでしょうか。

作者は恋愛小説というものを書いたことがないので、不安だらけであります（恋愛だけじゃないけど）。

感想・評価を頂ければ、飛び上がって踊り喜びます。

さわわ、と冬独特の冷たく乾燥した風が森の中を吹き抜けた。雪は止んだが、辺りの雪は溶ける気配がない。白銀の背景は、いつも通り。そのまま。

極寒の森の中で、抱き合つ二人の男女がいた。

一人は眩しい金色の髪に透き通る青い瞳。もう一人は癖のない白銀の髪に、濃蒼色の瞳。この世のものとは思えない白い肌の儂い美貌。しかしこの厳寒の地には不向きの薄い袖なしワンピースを着ている。丈も膝までしかなく、彼女の華奢な腕や脚はさらけ出されている。

そんな軽装では凍え死にそうだが、彼女は身震いひとつしない。寒さなどは感じないのでだろうか。

風が通り抜けるたびに、彼女の白銀の髪が靡く。空高く聳える塔の先で棚引く旗のように。

「……フェリシア」

「なんだ」

フェリシア、と呼ばれた少女は金髪の少年を見上げた。白銀の長い睫毛が怪しく光る濃蒼色の瞳を縁どっている。

「改めて言つよ。フェリシア、君は何か僕にしてほしいことはない？ ブローチを拾つてくれたお礼として」

厳かに慎重に、言葉を選ぶように少年・カーティスはフェリシアに語りかけた。うやむやになってしまった過去を払拭するために。これは彼女のためにも、自分のためにも。

そしてフェリシアもカーティスと同じく、過去に上書きするよう

に言葉を織つた。

「私の願いはただ一つ。探してほしいことがあるのだ。……カーティス、私と共に探してくれないか」

フェリシアは前回の台詞とは一部分変えた。『お前』を『カーティス』にしたのだ。

嗚呼、あいつ以外の名を口から出すのは初めてだ。お前が、カーティスが私にとつての初めてになるのだ。

過去の出来事、嬉しかったこともつらかったことも一瞬で走馬灯となつて駆け廻る。

フェリシアは瞼をそっと下ろして視界を暗くした。自分の分身以外が自分に触れる感触は、より鮮明になつて。

あの時は生きることなど知らなかつた。ただ、あいつの傍に居られることだけで。本当にそれだけで良かつた。

カーティス、お前は私に何かを示そうとしているのか。だとすれば私は正しくその意味を汲み取らねばならない。それはお前のためにも、私のためにも。そして、あいつのためにも。

私は待つだけだった。森という殻に閉じこもつて孤独を纏い続けてきた。だが、待つだけでは駄目なのだ。カーティスが何度も私を捲しに来てくれたように。探す、出逢う、ということは待ち続けるのではなく、自らの足で出向き、自らの耳で音を鼻でにおいを、目で確信を得るということ。

ここでしか生きられないというのは、きっと嘘だ。孤独が更に深くなるのを恐れて、自分を保護膜で覆つていただけなのだ。生きる意味とあいつを探し見つけるために、私は。

「この森を出たい。外の景色を見てみたい。外を自分の足で歩いてみたい。耳で鼻で目で、今までにはなかつた新しいものを感じ取りたい」

いつもはない、舌が軽やかに回る様をカーティスはじつと見つ

めていた。

今この瞬間を、そしてこれからを大切にしていきたい。フェリシアの濃蒼色の瞳はそう語っていた。

カーテイスは密着させていた身体を名残惜しそうに離した。フェリシアも黙つて白い腕をカーテイスの背中から離した。

「……フェリシア」

濃蒼色の瞳がカーテイスの瞳を見つめる。

「僕と一緒に、外へ行こう」

「……ああ」

冷たい風がまた吹き抜けた。

* * *

「カーテイス」

凛とした小鳥のように高い声がカーテイスの足を止めさせた。

図書館へ向かう階段。そこで違つたのは宝石よりも明るく煌びやかな琥珀色の柔らかい髪。筋が通つた鼻に真紅の薔薇を咲かせたような唇。そして、視線を吸い込んでしまいそうな宝石そのものの瑠璃色の瞳。髪の色は異なるが、ジュリアナと面影がそつくりなこの女性は。

「母さま」

エリノーラ・エアルドレッド。旧姓ベックフォード。そう、四兄弟の母親だ。

エリノーラは紺をベースにした見事なドレスの裾をさばきながら、カーテイスに近づいた。胸元に控えめに飾られた白いレースが歩く

たびにふわふわと揺れる。

至近距離で見ると、琥珀色の髪と瑠璃色の瞳は鮮やかさを増す。一言では言い表せない美貌。カーティスは幼いころ、この母は宝石で創られていくと勘違いしていたほどだ。

エリノーラは薔薇よりも艶やかな唇を開く。

「カーティス。この寒い中、最近よくどこかへ出かけているようね」
その美貌を直視できないのか、恥ずかしいのか、母なのに何故かまごついているカーティスにエリノーラは誰よりも美しく完璧な微笑を浮かべて、手袋越しに息子の手を握った。ほんのりと温かい体温が二人の身体を滑るように伝っていく。

最近は母は晩餐会や舞踏会、息子はいつも通り勉強漬けの日々だつたので直接顔を合わせる機会が少なかつた。久しぶりの息子の手の感触は父兄には劣るが、母にはない硬さを纏い始めていた。嗚呼、もう息子はただの可愛らしかった息子ではないのだなあと思い知られた。子供の成長を喜ばない親はいない。だから大人へと姿を変え始めた成長は勿論嬉しいのだが、いつまでもちっちゃな愛らしい息子をみていたかったと思う自分もある。人形のように軽々と抱っこをしていた日はもう遠い過去の話だ。

「あの、それは誰から……？」

「ジュリアナからよ。寒いのに出歩いて風邪なんか引かないかしら、つて心配していたわ」

そう言ってエリノーラは息子の手をしっかりと握りなおした。ジュリアナと同じように細い手首や指を、カーティスも握り返す。
「姉さまが……」

「そうよ。ジュリアナはあなたが産まれたときからべつたりだつたもの。一人の弟がよっぽど可愛いんでしうね。勿論母も」

母の言葉に一気にぼつと赤くなつたカーティスを見て、エリノーラはふふっと笑い声を漏らした。一人の兄では見られなかつた反応だ。何だ、まだウブなちつちつ息息子だわ、と安堵する。可愛すぎるので、からかってやることにした。

「ねえ、いつも何処へ忙しく馬車を走らせていくの？ 抱きしめた
い女の子を見つけたのかしら？」

「……え、あ、……それ、は……」

言葉を濁らせている様子を見て、どうやら図星ね、と笑う。
何とか否定しようとしているカーテイスに、エリノーラは追求を
緩めない。

「逢い引き？」

するとカーテイスは林檎がはち切れそうになつた後、撃沈した。
あらいけない。恋愛経験がない息子に踏み込みすぎちゃつたわ。
エリノーラは真っ赤になつて俯いている息子の頬に手をあて顔を
上げさせると、ジュリアナよりも柔らかく微笑んだ。この微笑みは
きっと天使でさえも敵わないであろう。

「大好きな人ができたのでしょ？ だつたら恥ずかしがる必要も隠
す必要もないわ。堂々としてなさい。大好きな人を見つけられると
いうのはとっても素晴らしいことなのだから」

カーテイスは驚いたような表情をすると、母に尋ねた。

「素晴らしい……？」

「ええ、とつても。その人が運命の人なら尚更ね」

「では、母さまの運命の人とは……？」

つぶらな瞳をして真剣に訊いてくるカーテイス。そんなに大切な
女の子なのね、と微笑ましい。

「それは勿論父さまよ。巷じや貴族の家は政略結婚だなんて言つて
るけどね。私とエルバートは確かに運命でつながっていると信じて
いるわ」

父さまと言わず、名で呼んだエリノーラの顔の中に、若く恋する
娘の顔が垣間見えた。今は夫婦となつた昔の一人を思い浮かべてい
るのだろう。その出逢いから今現在までどれほど幸せだったのがが
よく分かる。

「運命の出逢いは時間を選ばないわ。この人だと思ったら、雑音を

「気にせずその人だけを愛しぬきなわい」

そう言つと、母は息子を思い切り抱きしめた。エリノーラの身体からばジュリアナと同じ香りがした。

2・6（後書き）

更新遅すぎですね……。

カーテイスの母ちゃんと姉ちゃんは優しい良い人です。

私はゴスロリ大好きなので、機会があればそういう服着てみたいな

あ。

個人的にフェリシアがゴスロリ着てるのが見たい……。誰かイラスト描いてくれないかなあ。

白銀が積もりに積もって、長く大きいシーツが一面に広がっているかのようだ。

雪は一向に治まる気配がない。冬は今がピークなのだ。寒さは沸騰した湯でさえも瞬時に凍らせてしま

『僕と一緒に、外へ行こう』

うという有り様だ。どれだけ上着を重ねても防ぐことはできない寒さは滲み込んでくる。

あのときフェリシアに言つたことは嘘ではない。嘘にするつもりはない。フェリシアへの礼はまだ果たせていないのだから、彼女の願いはかなえて上げなければ。

しかし可能なのか。フェリシアの『探しもの』を見つけるのには長期間かかりそうだし、外で過ごすとなると。いつどこで寝泊まりするのか、食事は、着替えはどうすればよいのか。約束を守るうとするカーティスの気持ちに衣食住の問題が立ちはだかる。それに。

父親が許可してくれるかどうか。

嘘で通そうかと思ったが、嘘が思いつかなかつた。たとえ通つたとしても、もし真実が発覚した場合……カーティスは想像できない。カーティスはフェリシアと外に行きたい。彼女は外のいろいろな世界をみてみたいと言つた。それはカーティスも同じだ。外に出て市民の姿をみたこともないし、街にどのような建物が、どのような人々がいるのか。全く知らない。

だから自分も、自分の知らない世界を見てみたい。沢山のことを学びたい。だから今すぐでも、フェリシアを連れて外の街へ行きたい。でも。

「何も知らない僕が、何をどうやってフェリシアを護ればいいんだろ？」

外はきっと危険がいっぱいだ。最近の新聞では民家が強盗に襲われて死傷者が出たり、殺人犯が跋扈している路地もあり、国は監視を強めているらしい。安全な貴族の屋敷とは違い、一歩出ればどのような危険が待ち受けているかは分からないのだ。

長兄のように頭脳明晰で胸襟秀麗ではないし、次兄のように忠魂義胆で鎧袖一触というわけではない。目立った文も武もない自分は一体どういったやり方で、彼女を守り生きていくべきのか。安直な気持ちでも外傷は受けなかつた今までとは違うのだ。

でも。

『この森を出たい。外の景色を見てみたい。外を自分の足で歩いてみたい。耳で鼻で目で、今までにはなかつた新しいものを感じ取りたい』

そう、心の底から望んだ彼女との約束を等閑にはしたくない。する自分は、嫌だ。

……僕倅で繋いでいる。僕はフェリシアと一緒に。

「だつからあ、わつちよつと向こいつなんだつて。わつもむけ悪い縁の看板の店でさ！……話聴いてる？」

「えつ、あつすみません。あの、もう一度お願ひできますか……」

「はあ！？ ふざけてんのあんた。あたしは一回言つたこと一度と言わない主義なんだよ！」

足元の樽を思い切り蹴られ、あまりの大きな音に首を竦める少女。ここは居酒屋の路地裏。しかし路地裏というわりには広い。使用済みの容器や残った酒が置かれており、しかも人通りがない。監視者の目もまだここには行き届いてないので、そういう奴には恰好のたまり場となつてゐる。酒の瓶を傾けてラップ呑みをしている奴もいるし、カードやコインのようなものを持ち込んで博奕している奴もいる。時々品なく大声で笑つたり奇声を上げたりするので、怖がりな少女は身体を震わせる。

「おおい、アンナ。案内してやれよ、ビーセンななチビツクなんぞにバレされやしないぜ！」

「こんなとこまで頑張つて来たんだからなあ？ いいじゃねえか」顔中刺青を施した男に顔を覗き込まれて、少女は泣き出しそうに顔を歪めた。男はげへへ、と下品に嗤つて少女に手を伸ばす。少女が避けようと身体を後ろにひっこめようとしたが、男は少女の腕をぐいと掴み、厚い胸に引き込んだ。

少女はか細く悲鳴を上げる。と。

「いつてえ！ 何すんだ！」

男の腕の力が緩んだので、少女はチャンスとばかりに太い腕の中からすり抜けた。

慌てて見ると、男は頭を押されて樽の上に腰かけた女を睨んだ。どうやら髪をひっぱられたらしい。

「アンナ、てめえ！」

「やめなつて。どうせそいつの処女でも奪おつてんだろ？ 嫌がる女を押さえつけて犯すつてやつほど見苦しいもんはないよ」ギリッと男が激しい憎悪で女を殺そうとばかりに睨む。しかし周

りの男の雰囲気が一瞬で変わったのを見て、しぶしぶ黙つた。

アンナと呼ばれた女は樽から立ち上がる。その振動で豊満な胸が揺れる。下着のような服装で、長い脚がすらりと伸びている。どんな男でも悩殺されそうな姿に、少女は思わず赤面して俯く。「めんどくさいねえ。でもここに居られるのも迷惑なんだよ。せつさと来なー」

アンナは周りの男から布の上着を押借すると、長い黒髪を靡かせてその場から早足で歩きだす。少女も慌ててアンナの背を追つた。

「ここだよ」

女としては随分背が高いアンナは、少女を見下げてぶっきらぼうに到着を告げた。

アンナが路地裏で言つていた通り、緑の剥げかけた看板が上がっている店だった。

何の店なんだろう、と店名を確認する前にアンナがさつと店内に入つてしまつたので、少女も同じく店に入った。

そこは、

「うわあ、綺麗……！」

赤、黄、緑。その他数えきれないほどの色が互いに飾り合い、宝石よりも立派な輝きを放つていた。上品な装飾物は星のように瞬いている。店前の汚さからは想像もつかない派手さに、少女は感嘆の声を漏らした。

貴婦人用の服や靴、それから化粧品等々が並べてある。女の子なら興味深々な品に瞳を輝かせながら、首を上下左右に動かしていると「何キヨロキヨロしてんだよ」とアンナから軽く小突かれた。

アンナはいかにも興味ないといった体で、迷いなく前に進む。「歩歩ぐ」と腰まで垂らした黒髪が揺れる。踵が高い靴は、床を蹴る音を刻む。言動は全く女らしくないが、その容姿は女そのもので艶めかしい。

私にはないなあ、こんな色っぽわ。

するとアンナは奥の階段を下り始めたので、少女も踏み外さないよつに精神を尖らせて下りていった。

階段を下りると不思議な音楽が流れていた。今まで物静かに過ぎていた少女には聴いたことが全くないものだつた。

音楽に耳を傾けていると、何やら甘い喘ぎ声が聞こえてきた。どうこうの場面なのか分からず辺りを見回して少女はひとつ息をのんだ。裸体に近い男女が抱き合ひ、接吻を交わしていたからである。そんな少女の怯えが伝わつたらしく、前を行くアンナは口元を持ち上げて妖艶に嗤つた。

「ああ、あんたみたいなお子様には刺激が強いかもねえ。迷子にならないよつちゃんと着いてくるんだよ、お嬢ちゃん」
子ども扱いに少々腹が立つたが、事実その反論はせずに黙つてアンナの後をついていく。

しばらく田のやり場に困つたが、誰も少女に絡んでくれないとほなかつた。

まあそれはそうよね。アンナさんみたいに田に出でないと出てないし。自分の胸を見て若干氣落ちしたが、今回ばかりは良かつたと思つた。

「よつ、田那あ。いつものある？ ヤサの奴らが切らしてつづかいからさ」

アンナは見当ての男を見つけたらしく、身を乗り出して男の頬に触れる。それだけの動作だが、かなりの刺激で少女には直視するのも難しい。

豊満な身体のアンナにせまられた男は機嫌良さず、アンナに声をかける。

「ああ、あるとも。しつかし毎回量が多いが大丈夫か？」

「大丈夫に決まつてんだろ。あたしを誰だと思つてんだい？ そこのなよつちい女と一緒にするんじゃないよ」

「やうだな。んじやお代を……」

手を伸ばした男の手をアンナは躊躇いもせず、舌を出したて舐めた。そのまま男の身体に凭れかかり、腕を男の肩に回す。

「悪いが金は持ってきてないのさ。身体で払わせてもらひつよ」

そう言つと男はアンナの唇を唇で塞いだ。舌を絡ませあつているよつで、卑猥な音が響く。

男の手はアンナの胸に手を入れまさぐり始めた。そのままの勢いで服を下ろそうとした男の手をアンナが掴んで止めた。

「それ以上はまた今度だ。田の前に経験がないお嬢さんがいるだろ」アンナが激しい接吻を交わしていたままの体勢で少女を見た。自分がされていたわけではないが、終始見ていた少女は真っ赤になつていた。

「そういうわけでこれはいただいておくよ」

アンナは男のシャツから袋に入つた白い粉を取り出す。

男は咎めることはせず、アンナの髪を梳いた。

「全くアンナには敵わないなあ。まあいいや、また今度な！」

「ああ、また今度」

アンナは男の腕からせりと立ち上がると、来たときと同じよつて早足で歩き始めた。

な、慣れてるのね……。

少女はまだ刺激でくらべりする身体で、何とか階段を上つた。

「ほら、これでいいだろ！」

アンナは男から手に入れた袋を放つて少女に寄越した。

「あ、ありがとうございます……」

慌てて受け取つた少女は袋の中の白い粉を見つめた。

「しつかしあんた、それ誰に頼まれたんだい？　あんたがするよつな物じやないだろ？」

「あ、えつと、お密さん頼まれたんです」

「お密う？　あんた店なんかやってんの？」

アンナがぐいっと顔を近づけてきたので、少女は狼狽えながら答

えた。

「は、はい……」

「そんな怖がらないよ、あたしが泣かせてるみたいじゃん。で、何を商売としてるの？」

少女が怖がらないよにか、アンナは姿勢を元に戻した。

少女はアンナが少し怖くなくなつたので、狼狽えるのをやめた。

「代理屋です」

「代理屋あ？」

アンナがまた再び顔を近づけてきて尋ねたので、少女はひとつまた一步退いた。やつぱりアンナさん怖い。

でも尋ねるのは当たり前だろ？『検索屋』と書いて理解できる人間は自分と客だけだ。少女はアンナに簡単に説明する。

「お客様が望むものを私が代わりに買つてきたり、探してきたりするんです」

「はあん。それで世にも危険な『麻薬』を？」

『麻薬』。

分かつてはいたが指摘されると身が縮む。

「あのやつぱり……、バレたら」

「やばいに決まってるだろ。あたしの仲間だつてそれで何人か捕まつたし」

アンナの即答に更に身が縮む。

分かつてはいるが、麻薬を使用しなくても所持しているだけで牢獄にぶちこまれる正当な理由になる。

顔が青ざめてきた少女を、アンナは笑いで吹き飛ばした。

「だーいじょうぶだつて！ バレたら、なんて言つけど要はバレンタインだよ」

それに、とアンナは続ける。

「あんた仕事でやつてんだろ？ そんなもの頼む客が悪いんだよ」「迷いなく即答するアンナに、少女はほんの少し救われたような気持ちになつた。

少女は自然と微笑んでいたのだろう。アンナもにっこりと笑つて、少女の亞麻色の髪をわしわしと撫でた。

それから少しばつて悪そうな顔になつて、

「……最初は怒鳴つてごめん。周りの奴らの分も含めて、怯えさせて悪かつた」

最初の態度とはえらい違いだ。

アンナさんつていい人なのね。と見直す。

「いいえ、全然！ むしろありがとうございました」

声は慄懾としているが、あのときの行為を思い出してか真っ赤になつている少女に、アンナは「そういうば」と撫でてこる手を止めた。

「あんた名前なんていつの？ ……あたしも困ったときあなたの店に行きたいしや」

後半は少女から眼を逸らした。素直じゃない態度に少女はくすつと笑う。

途端「何がおかしい」とばかりにアンナの軽い睨みが飛んできたので、少女はとりあえず笑いをひっこめた。

それからアンナにひっこりと微笑みかける。

「シェリルです」

是非訪ねてきてくださいね、と付け足すと、アンナは満足そうにまたシェリルの頭を撫でた。

3・1（後書き）

おおおおお

また更新に間が開いてしまいました……。

今回から3章突入です。

新キャラもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8224y/>

白銀月夜の狼

2011年12月27日19時54分発行